

# 国頭村安波の臼太鼓

## —歌の伝播に関する一考察—

こ ばやし きみ (注1)  
小 林 公 江

### はじめに

国頭村は沖縄本島最北に位置する村で、面積は本島では最も広いが、大半が山地であるため、各村落が海岸近くに位置しており、総面積に対しての村落数の最も少ない村である。山地が多い故にかつては村内交通も不便で、特に東西交通は1956年に与那・安田間の政府道が完成するまでは、東側から西側にある村役所の半日の会議に往復3日も費やすというほどの不便さであった。<sup>(注2)</sup>一方海上交通は、東海岸が与那原と、西海岸が那覇と行き来があっただけでなく、中南部より距離的には近い与論、沖永良部の島々や、更に徳之島、奄美大島との行き来も盛んであったようである。<sup>(注3)</sup>

本論は1974年～1983年の小林幸男、金城厚、及び筆者による沖縄諸島の民謡共同調査、1990～1993年の小林幸男、及び筆者による沖縄諸島の民謡調査<sup>(注4)</sup>を基に、国頭村の東海岸最南に位置し、長年「陸の孤島」と言われてきた安波の臼太鼓をとり上げ、資料化（楽譜・歌詞資料）とともに以下の4点

1. 安波の概観
2. 安波臼太鼓の概要
3. 安波臼太鼓の音楽的側面
4. 安波臼太鼓からみたレパートリィの諸問題

から安波臼太鼓について報告し、併せて安波臼太鼓と他地域の臼太鼓・奄美の八月踊等との比較を通じて、曲の伝播やレパートリィの問題についての考察を試みた。

## 1. 安波の概観

安波は国頭村東海岸側の最南の字である（地図参照）。マク（マキヨ）名は

「おーじまく」で、集落は安波川右岸の清水山の中腹（島中）から開けていき、次第に上流の福地、対岸の前田へと広がっていった。<sup>(注5)</sup> 廃藩置県以前から安波－奥間、安波－辺土名間に道路はあったが、<sup>(注6)</sup> 山を上り下りする険しい道であったらしい。1956年には与那・安田間政府道が完成したが、これもやっと車が通れるくらいの細い山道であった。現在では安波－与那を結ぶ道路は整備され、南側も東村まで舗装道路が続くが、筆者が初めて安波を訪れた1973年でさえ、安波－与那も安波－安田も前述のような車がやっと通る細い山道が通じていただけであり、字所有のマイクロバスが1日1往復するのみであった。このような交通事情から、道路が整備される以前の物資輸送は海上交通に頼っており、安波の経済圏は長い間、美里間切泡瀬港（現沖縄市泡瀬）・大里間切与那原（現与那原町与那原）方面に属していた。山原船は久志間切大浦（現名護市大浦）を經由して与那原方面と往来しており、上納米も国頭村の殆どの字が鏡地港（現国頭村鏡地）経由で那覇蔵に納められたのに対し、安波・安田は与那原経由で輸送され首里蔵に納められた。<sup>(注7)</sup> 安波港は《国頭口説》に「港まぎさや安波港」<sup>(注8)</sup>（港の大きいのは安波港、の意）と歌われるように東海岸で唯一の潮繫りに適した港であったらしく、大和の船が潮繫りした記録なども残っている。<sup>(注9)</sup>

産業はかつて林業が主であったが、現在はパインが主産物で、サトウキビなども作られている。人口は1992年7月末で87世帯239名である。<sup>(注10)</sup>

祭祀の面では、安波は公儀ノロが置かれた字で、ノロ殿内（方音ではヌンドゥヌチ）は島中にある。安波ノロの管轄は安波と安田だが、安波に公儀ノロが置かれる前は安田にノロがいたという伝承がある。<sup>(注11)</sup> 『沖縄ノロの研究』によれば、シヌグ・海神祭の当日、安波ノロはノロ殿内と火の神・世神を拝んだ後、徒歩で約6kmの山越えをして安田に行き、安田の御嶽を拝んだ後に再び安波に戻って安波での祭を執り行ったという。<sup>(注12)</sup>

## 2. 安波臼太鼓の概要

### (1) 行事の概要

安波では旧暦7月の初亥にシヌグと海神祭が隔年で行われ、臼太鼓はこの両方で踊られる。両行事を行うのは国頭村でも辺戸・奥以南の東海岸側だけで、

西海岸側では海神祭しか行われぬ。一般にシヌグは山の神、海神祭は海の神に対するものと位置づけられており、行事内容は幾らか異なっているが、両行事を行う所では海神祭を「シヌグン小」と呼んだり、シヌグを「大シヌグ」と呼ぶなど、シヌグを重要視している。臼太鼓は何れの行事でも一番最後に行われるが、現在は他の諸事が簡略化される傾向にあるため、行事の主要部分となっているように見受けられる。

国頭村のシヌグでは「山登り」が主になる催事で、安波でもかつては「フハ  
(注13)  
 ホーホー」という掛声とともに行われていたが、現在では行われていない。また、安波シヌグの日数は『山原の土俗』に、昔は5日に亙って行われていたが  
(注14)  
 最近では3日で済ませているということが報告されている。しかし、1977年の当山スミさんの話では、かつて2日であったが今は1日であるとのことで、次第に行事の日数が少なくなってきた事が窺える。

1993年のシヌグでは、あさぎで神ん人達の御願と神ん人による《かぎやでい風》の踊(注15)（音楽はテープによる）が行われた後、魚取りや船走らしが行われた。魚取りは魚に見立てた子ども達を男性達が大きな網で捕えるものである。船走らしは数名の青年が小さな旗状の帆を立てた棒を括りつけた1本の丸太を抱えて、神ん人達の座っているあさぎに向かって走っていき、先端をあさぎに突っ込むと、それをつかんだ神ん人が左右に手で揺るようにするという一連の所作を3度繰り返すもので、特に前半部分は隣字の安田シヌグで行われる「ヤーハリコー」に類似する。本来、ここでは青年衆の歌とノロ以下の神ん人のウミイが歌われるのだが、今日、歌詞が記録されてはいるものの、旋律は失われてしまった。

この日、女達はあさぎ庭に、男達はうんじょ一庭(注16)に各々別々に集い、行事に参加するが、うんじょ一庭に集まった男達は早くから酒盛りを始めていた。

一方、臼太鼓に参加する婦人達はぬん殿内で紺地の着物に着替え、午後7時前から臼太鼓を開始した。臼太鼓は場所を変えながら全部で3回踊られる。何れも「ちぢん」と呼ばれる太鼓（ここではパーランクー＝鋌留め片面太鼓）を手にした地謡いが先頭となって円陣を作り、向かい合う2方に別れている地謡の歌の掛け合いで踊りが進行していく。1回目は年輩の人々だけがあさぎの中で、2回目は全員があさぎ庭で踊り、その後場所をうんじょ一庭に移して3回

目が全員で行われた。臼太鼓の後は《唐船どーい》の節によるカチャーシーでにぎやかに締めくくられた。<sup>(注17)</sup>当山スミさんによれば、シヌグが2日間行われていた頃は時間的にもゆとりがあったため、《アヤグ節》などエイサー曲のようなものもやっていたという。

曲数は現在までに旋律が確認できたものは以下の14曲（16旋律数）である。<sup>(注18)</sup>

- |                        |              |
|------------------------|--------------|
| 1. 三年廻んぬしぬぐ            | 2. 宇地泊節      |
| 3. 恩納節                 | 4. 散山節       |
| 5. 干瀬に居る節（以下、《干瀬節》と記す） |              |
| 6. あたい苧節（2旋律）……        | 6-1. あたい苧節 1 |
|                        | 6-2. あたい苧節 2 |
| 7. 大田名節（2旋律）……         | 7-1. 大田名節 1  |
|                        | 7-2. 大田名節 2  |

8. あぬ伊集

<sup>(注19)</sup>  
はな節……

- |             |           |
|-------------|-----------|
| 9. ハリ諸鈍     | 10. ちんなく  |
| 11. ちんちゃぐぬ花 | 12. 永良部潟原 |
| 13. 安波節     | 14. あさぎ庭  |

平識カメさんによれば、この他に《くんみー節》と呼ばれる曲もあったが失われ、当山スミさんによれば、昔は18曲あったと言われているとのことである。

1974年に東京芸術大学民俗音楽ゼミナールが訪れた際には、臼太鼓に詳しい古老が複数名健在で、臼太鼓は14曲行われていた。しかし、筆者が訪れた1977年には1974年当時の歌い手は既に平識カメさんしかおられず、婦人会を中心とした人々はまだ古老の歌や踊を十分に消化していないという状況で「はな節」は総て省略されていた。1977年の状況はその将来が心配される程であったが、1993年には、9《ハリ諸鈍》 14《あさぎ庭》が省略されただけで、12曲（14旋律）が歌い踊られた。また、1977年は祭りの当日も衣裳を着替えずに洋服のままで執り行われたが、1993年には正式な衣裳である紺地で踊られた。

1973～1977頃には行事の省略化、伝承の不備による曲目の省略、縮小が安

波に限らず国頭村のあちこちの臼太鼓でみられた。しかし、それ以後、安波にみられるように古くからの形に近づく努力がなされ、当時心配した程には曲数の減少はみられず、むしろ、当時でさえ「昔は……」という形で語られた演唱形態迄もが復活している地域もみられる。この背景には本土復帰後の混乱の後、全島的に伝統行事を大切にするという意識が高まったことがあげられる。

## (2) 世代交代による演唱の変化

前述のように1974年・1977年・1993年の実況データの演唱曲目や演唱状況は各々異なっている。演唱状況は1974年が古老中心、1977年は前年に古老が録音したテープ（1《三年廻んぬシヌグ》と「はな節」を除く）を主として用いながら若い人々が演唱、1993年は世代交代後の演唱である。この結果、1977年までの演唱と1993年の世代交代後の演唱には以下のような変化が見られた。以下、古老の演唱——世代交代前——を〔前〕、1993年の演唱——世代交代後——を〔後〕で示す。

### ① テンポ

変化の中で最も大きいのがテンポである。〔前〕では、「はな節」は他曲に比べてテンポが速く、9《ハリ諸鈍》 12《永良部瀉原》が♩=46-48程度、10《ちんなく》が♩=48-50、他が♩=52-54である。「はな節」以外は遅いものが♩=42程度、幾らか速いものでも♩=46-48程度である。しかし〔後〕では〔前〕で♩=42-48であった曲が総て♩=8-10程度速くなっているのに対し、〔前〕でテンポが速かった「はな節」は♩=2-4程度しか速くない。

このため、「はな節」とそうでないもののテンポには違いがなくなり、むしろ1拍に多くの歌詞を当てはめる「はな節」の方が遅めになっている。この結果、臼太鼓全体は軽快になったが、ゆっくりしたものからテンポの速いはな節へ、あるいは緊張から解放へという展開は見られなくなっている。1993年には8《あぬ伊集》が「はな節」の後で歌われているが、これはおそらくこのテンポの変化のためであろう。

### ② 旋律

旋律線には大きな変化はない。しかし、テンポが速くなったため♩♩が♩

となるなど、古老の演唱に比べ細かな旋律の動きが少なくなっている。また、リズムが幾らか変化している例（5《干瀬節》 8《あぬ伊集》等）や休拍が増える例（2《宇地泊節》 3《恩納節》等）もみられる。

最も変化が大きいのは、13《安波節》である。臼太鼓の《安波節》は安波を含め、どの地域の伝承も終止部分が古典《安波節》とは異なっており、更に安波曲ではこれに独特の後囃しが付いていた。しかし、1993年の演唱は古典《安波節》と同じ終止になり、後囃しも変化していた。臼太鼓《安波節》の旋律が伝承されず、旋律の再現が可能な古典《安波節》に置き換えられたのであろう。

### ③ 歌詞

歌詞にも大きな変化はない。しかし、全体的に歌詞が少なくなる傾向にあり（歌詞資料参照）、「はな節」では明らかに歌詞レパートリーが少なくなっている。また、「はな節」以外も旋律には変化がないが、歌詞と音の当たり方が異なっている例（5《干瀬節》等）が多々みられる。

## (3) 安波臼太鼓に関する資料

安波臼太鼓について書かれたものや楽譜資料には以下のものがある。

### ① 島袋源七『山原の土俗』

具体的な曲名などの記述はないが、「二、シヌグ 安波のシヌグ ハ ウスダイコ」の部分に、「午後四時ごろになると、各自酒肴を携えて神アシアゲの庭に集合する。この日は別に祈願もなく、神人も平服のまま来て、字内の婦女のウスダイコ踊りを見物するのである。」<sup>(注20)</sup>と、臼太鼓の状況が簡略に記されている。

また、同書の「六 ウンデーク」の項には大宜味村喜如嘉・屋嘉比等とともに安波臼太鼓もとり上げられ、ウンデークに関する説話と節名・歌詞が記録されている。節名は《うちどまい節》《屋葺き節》《石のちじ節》《干瀬ニビル節》<sup>(注21)</sup>《うふだな節》で、このうち《屋葺き節》《石のちじ節》は現在では行われていない。本書の記録は、凡例の大正14年9月3日という日付からもわかるように、今から70年以上前のもので、当時の臼太鼓の一端を知る

資料として貴重である。

② 宮城栄昌『沖縄の祝女の研究』

本書では「第五 ノロツカサの祭祀 三 現代の祭祀 6 シヌグ海神祭」の項に国頭村与那と並んで安波の臼太鼓歌の節名が「宇地泊節・恩納節・散山節・干瀬に居る鳥節・大田名節・じんなく節・永良部潟原節と、あるときには、かぎやで風・安波節・みつまんのシヌグを謡っている。」<sup>(注22)</sup>と記されている。この中で筆者が調査した範囲では、《かぎやで風》に該当する曲は臼太鼓では歌われてはいなかった。この資料によれば《かぎやで風》以下は必ずしも歌われるとは限らないようである。これは安波出身の宮城氏の経験によるものであろうか。

③ 『沖縄民謡採譜集 I 国頭』

これは、筆者も所属する東京芸術大学民俗音楽ゼミナールの1973年・1974年の国頭村調査に基づき作成されたもので、楽譜と歌詞の資料（全2巻）である。安波臼太鼓の掲載曲は、2《宇地泊節》 3《恩納節》 4《散山節》 5《干瀬に居る節》 7《大田名節》 10《じんなく節》 12《永良部潟原節》 13《安波節》 14《あさぎ庭》<sup>(注23)</sup>の9曲である。

④ 「沖縄県北部のウシデーケー国頭村・大宜味村・旧久志村の歌と踊の比較研究」<sup>(注24)</sup>

筆者の修士論文で、その資料の一部として安波臼太鼓を報告している。③の資料を踏まえて行った筆者等の1977年の調査に基づくもので、楽譜・歌詞・舞踊譜の資料である。1977年には1974年当時の歌い手は既に平識カメさんしかおられず、前年に字が古老の演唱を録音した保存用テープと、筆者達が平識さんの歌や踊を録音・録画したテープ中心に資料化している。掲載曲は、《三年廻んぬしぬぐ》《宇地泊節》《恩納節》《散山節》《大田名節1》《大田名節2》《干瀬に居る節》《あたい苧節1》《あたい苧節2》《あぬ伊集節》《ぢんなく節》《ちんちゃぐぬ花》《ハリ諸鈍節》《永良部潟原節》《安波節》《あさぎ庭》の14曲16旋律である。

以上の中で歌詞・楽譜資料は③④であるが、何れも内部資料的な扱いであるため、今回は上記資料を再検討し、更に1993年の演唱も加えて新たな資料化

を試みた。

### 3. 安波臼太鼓の音楽的側面

臼太鼓の楽譜は資料1に示した。曲数は14で、このうち2旋律が続けて歌われて1曲とされる6《あたい苧節》と7《大田名節》は、節名の後に番号をつけてその違いを示した。この16旋律のうち、9《ハリ諸鈍》以降の6曲は平識カメさんによれば「はな節」と称される。この16旋律を楽曲構成・音階・リズムの面から分析したことを以下に示す。分析は基本的には古老の演唱を対象とした。

#### (1) 楽曲構成

楽曲の構成を歌詞との関連で捉え、琉歌の短歌一首に対する旋律の在り方を分類した。12《永良部潟原》は琉歌の短歌ではなく、9《ハリ諸鈍》も歌詞の欠落？で琉歌体で歌われてはいないが、他地域の琉歌体の同系旋律に準じて考察した。各句の旋律はA, B等で示している。

##### I 反復を含むもの

- 全句反復                   《ハリ諸鈍》  
  ……但し囉し詞は4句目で付く例が多い。

- 上句下句反復

- A B A B           《干瀬節》《あたい苧節1》《あたい苧節2》
- 《あぬ伊集》《永良部潟原》《安波節》
- A B A' B          《宇地泊節》
- A B A B'          《恩納節》

- 反復旋律を含むもの

- A B B C          《三年廻んぬしぬぐ》
- A A' B C          《大田名節1》
- A A B C          《ちんなく》《ちんちゃぐぬ花》…下句反復

##### II 反復を含まないもの   《散山節》《大田名節2》《あさぎ庭》



上句下句反復が多いのは、臼太鼓歌全体にみられる傾向である。安波では、4句中に反復を含む曲は全句反復や上句下句反復とは異なり、反復を含まない4句完結的な旋律の在り方に近い。

下句反復は、他地域では7《大田名節1》《大田名節2》にもみられるが、安波では10《ちんなく》 11《ちんちゃぐぬ花》にしかみられない。

## (2) 音階

音階は厳密に言えば様々な要素が混在しているが、ここでは大まかな傾向のみで分類した。<sup>(注25)</sup>

### I 琉球音階が中心であるもの

《三年廻んぬしぬぐ》《恩納節》《干瀬節》《あたい苧節1》

《大田名節1》《大田名節2》《ハリ諸鈍》《永良部潟原》《あさぎ庭》

### II 律音階が中心であるもの

《ちんなく》

### III 琉球と律のテトラコルドが混在するもの

《散山節》《あぬ伊集》

### IV 呂音階

《安波節》

### V 3度堆積

《宇地泊節》《あたい苧節2》

臼太鼓歌では、一般に琉球音階が多くみられる。この場合、下のテトラコルドに律のテトラコルドが混在したり、経過的にd音が用いられることが多いが、安波ではあまり多く見られない。また、琉球音階以外のものも多種みられるが、これは安波臼太鼓の特徴でもあり、国頭村の臼太鼓の特徴でもある。

## (3) 旋律型

臼太鼓の旋律には複雑なものが多いが、ここでは旋律がどのように開始し、開始の音域に対しどのように展開するかという点にのみ注目し分類した。

## I 上行的に開始

- 2句（2句以降）は1句より低音域で動く  
《三年廻んぬしぬぐ》《恩納節》《あたい苧節1》《あぬ伊集》
- 全体に上行し下行する  
《大田名節1》

## II 下行的に開始

- 1句～3句は下行的で4句で上行  
《散山節》
- 1句はあまり動かないか下行的、2句は1句より低音域  
《宇地泊節》《干瀬節》《あたい苧節2》《大田名節1》《ハリ諸鈍》  
《ちんなく》《ちんちゃぐぬ花》《永良部潟原》《安波節》《あさぎ庭》

全体に下行的傾向を持つものが多いが、上行的に開始する曲は殆どが歌詞進行の遅い曲である。一方、「はな節」は総て下行的であり、4句完結的な旋律も殆どが下行的であることが注目できる。

## (4) リズム

臼太鼓歌のリズムに関しては以下の2点について考察した。

## ① 歌詞進行及び産み字や句中の「ヨ」等の位置。

歌詞進行に産み字や句中の「ヨ」等の位置を重ね合わせて分類したもので、数字は歌詞各句の音の位置、「ヨ」はヨ音、「ウ」は産み字、「カ」は重ね字、・は半拍以上の休止を示す。例：3ヨ5ヨ……「うんなヨだきヨぬぶてい」。( )はある場合とない場合があるものである。

## A. 歌詞進行の遅いもの（1音に1～2拍）。以後「大節」と呼ぶ。

《ハリ諸鈍》	1句－3ヨ5ヨ6カ	(全句反復)
《恩納節》	1句－3ヨ5ヨ	(上句下句反復)
《宇地泊節》	1句－5・7ウ 2句－・4ウ	(上句下句反復)
《あぬ伊集》	1句－5ヨ7・ウ 2句－・4ウ	(上句下句反復)

《あたい芋節 1》	1 句 - 5 ヨ	2 句 - 3 ヨ	(上句下句反復)
《干瀬節》		2 句 - 2・ウ	(上句下句反復)
《三年廻んぬしぬぐ》	1 句 - 5 ヨ (ウ)	2 句 - 5 ヨ (ウ)	
	3 句 - 3 ヨ 5 ヨ		
《散山節》	1 句 - 7・ウ	2 句と 4 句 - 4 ウ	

#### B. 歌詞進行が 1 音に半拍～1 拍程度のもの

《大田名節 1》	1 句 - 7・ウ	
	3 句 - 7・ウ	
《大田名節 2》	1 句 - 7・ウ	
《あたい芋節 2》《永良部潟原》《安波節》	……句の中断はない	

#### C. 歌詞進行の早いもの

《ちんなく》《ちんちゃぐぬ花》《あさぎ庭》……句の中断はない

A は総てに歌詞の中断が見られ、1 句では 3、5、7 音等、2 句では 4 音での中断が多い。他地域の曲も検討すれば、この中断の位置には一定の法則がみられそうである。3、5 音は歌詞中の語の区切れと重なる可能性があり、必ずしも歌詞の意味不明とはならないが、4、7 は必ず歌詞の語の途中で切れるため意味が不明になりやすい。何故このような位置で歌詞の中断が生じてきたのかについては今後の課題としたい。なお、6-1 《あたい芋節 1》は 2 句の 6～8 音が欠落しているが、この中断が関係あるのかもしれない。

B は中断があるものとないものがあるが A 程には多くなく、位置も 7 音のみである。C では中断は全く見られない。

#### ② 歌詞進行と歌詞のシラブルのリズムパターン

歌詞のシラブルのリズムパターンは、久万田晋『奄美民謡旋律のリズム構造』<sup>(注26)</sup>の方法を応用し、各句の歌詞の各音がどのようなリズムで展開するかを調べたもので、これを前述①の A～C と重ね合わせて分類した。

#### A. 歌詞進行が遅いもの 「大節」

典型となるリズムパターンは抽出できない。しかし、句の初めに《宇地泊節》《散山節》では譜例中の〈a〉が、《宇地泊節》《恩納節》《散山節》では譜例中

の〈b〉がみられることから、今後、各地の同系旋律や歌詞の中断を共有する旋律を検討することで、定型的なリズムが抽出できるかもしれない。

## B. 歌詞進行が1音に半拍～1拍程度のもの

1. 全曲に類似したリズム型の反復がみられる（譜例〈c〉〈d〉参照）。他地域に旋律同系曲があるものはそのリズム型も比較した結果、地域により幾らか違いがあるものの、リズム型はおおむね類似している（譜例〈d〉〈f〉参照）。
2. 〈c〉は上句下句反復型で〈d〉の曲より歌詞進行が遅く、〈d〉の曲は4句完結的な旋律で〈c〉の曲より歌詞進行が速い。このように音楽的な性格の違いは、安波では歌詞のシラブルのリズムと明らかに結びついており、明確に区別することができる。
3. 〈d〉のリズム型は、他地域の臼太鼓曲《金細工》《よーねぬ》《ヨーカナ》《東細》——各々別旋律。何れも複数の地域に分布——にも共通してみられる。これらの曲は、7音で中断することも一致しており、1つの典型的なリズム型と考えることができる。

## C. 歌詞進行の早いもの

1. 3曲中2曲に譜例中の〈e〉のリズム型がみられる。他地域でもこれに類似するリズム型——国頭村与那《ムチクシ》や名護市安和《伊江大麦》——がみられ、また、奄美八月踊り歌《シュンカニ小》等も同系のリズムを持つ。従って、譜例4のリズム型と同様に典型的なリズム型の1つであるということが出来る。しかし、臼太鼓のレパートリィ全体ではこのタイプの曲は極めて少なく、臼太鼓の代表的なリズム型とは言いがたい。
2. 3曲中1曲にはリズム型の反復がみられない。後述のように本土から伝わった可能性がある曲である。

### 譜例

〈a〉～〈f〉は、安波曲の歌詞のシラブルのリズムパターンを示したものである。＊は半拍の休み、ウは産み字、ヨは囃しのヨを示し、リズムの展開をわかりやすくするため、2拍毎区切りを付した。

- 〈a〉 1— — — | 2— 3— | 4— — — | — — 5— | (または | ＊ウ 5— | )  
 〈b〉 1— 2— | 3— 4— | — — 5— |

<c> 類似パタンの反復（上句下句反復旋律）

《永良部潟原》 1 - 2 - | 3 - - - | 4 - 5 - | - 6 7 - | 8 - ササ |  
 1 - 2 - | 3 - - - | 4 - 5 - | - 6 7 - | 8 - ヒクリ |  
 《安波節》 \* 1 2 3 | 4 - - - | 5 - - 6 | 7 - - - | 8 \* ハリ |  
 1 - 2 3 | 4 - - - | 5 - - 6 | 7 - - - | 8 \* |  
 《あたい芋節 2》 \* 1 2 3 | 4 - - - | 5 - - - | 6 - 7 8 |  
 \* 1 2 3 | 4 - - - | 5 - - - | 6 - 7 - | 8 |

<d> 類似パタンの反復（上句下句反復旋律ではないもの）

《大田名節 1》 \* 1 2 3 | 4 - - 5 | - 6 7 \* | \*ウ 3 ヨ |  
 \* 1 2 3 | 4 - - 5 | 6 - 7 8 | ヒヨスリ |  
 \* 1 2 3 | 4 - - 5 | 6 - 7 \* | \*ウ 3 ヨ |  
 1 - 2 3 | 4 - - 5 | 6 -  
 《大田名節 2》 \* 1 2 3 | 4 - 5 - | - 6 7 - | \*ウ 8 スリ |  
 - 1 2 3 | - 4 - 5 | \* 6 7 8 | サンドスリ |  
 \* 1 2 3 | - 4 - - | 5 - | \* 6 7 - | - - 8 スリ |  
 - 1 2 3 | - 4 5 - | 6 - | ヨンナ \* |

<e> 《ちんなく》 1 2 3 4 5 | - 6 7 8 |  
 1 2 3 4 5 | - 6 7 8 | ギンナク - |  
 1 2 3 4 5 | - 6 7 8 |  
 1 2 3 4 5 | 6 - ヒヤルガ | ギンナク \* |  
 《あさぎ庭》 1 2 3 4 5 | 6 7 8 - |  
 1 2 3 4 5 | 6 7 8 - |  
 1 2 3 4 5 | 6 7 - 8 |  
 1 2 3 4 5 | 6 \* |

<f> 参考例：大宜味村喜如嘉《苦菜》……《大田名節 2》の同系旋律

1 句 1 2 3 - | 4 - 5 - | 6 7 - - | - 8 スリ - |  
 2 句 1 2 3 - | 4 - 5 \* | \* 6 7 8 | サンドスリ |  
 3 句 \* 1 2 3 | - 4 - 5 | - 6 7 - | - - 8 スリ |  
 4 句 - 1 2 3 | - 4 5 - | - 6 | ヨンナー |  
 3 句 - 1 2 3 | - 4 - 5 | \* 6 7 8 | サンドスリ |  
 3・4 句の反復

以上のように、安波臼太鼓では多様なリズムの諸相を見ることができ。それぞれの歌詞進行やリズムに一定のまとまりがみられることから、現在の臼太鼓は、まとまり毎に同時代に成立したか流行したものを取り入れながら形成されてきたのであろう。Aは臼太鼓の中核をなし、Cは後から臼太鼓のレパート

リィに加えられ、BはおそらくCより早い段階で臼太鼓のレパートリィ化したと考えられる。

### (5) まとめ

以上のように、安波臼太鼓曲には音楽性の各面に多様性が見られる。しかし、無秩序ではなく以下のように一定の傾向が見られる。

- ① 歌詞進行の遅い曲（A）では、歌詞に中断があり、楽曲は上句下句反復の傾向が強い。音階は琉球音階が多く、歌詞シラブルのパターンは明確ではない。
- ② 歌詞進行が1音1拍程度の曲（B）は、歌詞シラブルのパターン反復は共通するが、曲が上句下句反復型か、4句完結的かで2タイプに分けられる。前者は歌詞の中断がなく、音階はヴァリエティに富む。後者は歌詞の中断があり、音階は琉球音階である。
- ③ 歌詞進行の速い曲（C）には歌詞の中断がなく、楽曲は4句完結的である。歌詞シラブルのパターンもみられる。

以上は、安波という1つの集落の伝承曲に見られる傾向であるから、多様とはいえ、必ずしも一般化できる傾向ではないかもしれない。しかし、今後、他の伝承地域の曲や他の音楽ジャンルの曲を検討していく上で、1つの指標として考えていきたい。

## 4. 安波臼太鼓からみたレパートリィの諸問題

### (1) 国頭村の臼太鼓と安波臼太鼓

国頭村には1908年以後に独立した4ヶ字を除いて古くから16の字があり、この中で安波・安田・楚洲・奥・辺戸・与那・奥間の7ヶ字が臼太鼓を伝承している。かつて辺土名にもあったと言われるが、現在ではこれについては全く判っていない。一方、女性による七月舞は、宇嘉・謝敷・与那・辺土名・奥間の5ヶ字で伝承され、辺野喜・比地で伝承が絶えている。

公儀ノロが置かれた字は安波・奥・辺戸・与那・辺二名・奥間で、辺土名に臼太鼓があったことが事実とすれば、国頭村においては何れのノロ所在の集落でも臼太鼓が伝承されていたことになり、この芸能とノロとは関わりが深いことが示唆される。(楚洲は1736年奥から分村したため奥ノロの管轄であり、安田は安波ノロの管轄だが公儀ノロ以前には安田ノロが存在し、安波ノロは安田ノロが移住したという。)<sup>11)</sup>

臼太鼓に関連する行事は、沖縄本島でも地域により様々に異なる。主な行事を挙げると、i. シヌグ・海神祭、ii. 十五夜、iii. 盆で、iは北部に多く、iiやiiiは中南部に多い。シヌグ・海神祭はノロを中心に神人達が執り行う行事である。現在シヌグが行われるのは本部町や国頭村の東海岸側等であり、海神祭が行われるのは今帰仁村古宇利・大宜味村・国頭村等である。従って、国頭村の東海岸側の字——安波・安田・楚洲・奥・辺戸——のみが、隔年で両行事を執り行っていることになる。

『国頭村史』では、シヌグは

少なくとも国頭間切では各村落にあったものが、由来記(『琉球國由來記』……筆者)成立のころまでに宇嘉以南ではそれが廃止されていたとみられる。現在のこれら地域の海神祭には、シヌグ祭の要素も加わっているから、シヌグは海神祭の中に融合したとみた方がよい。<sup>(注27)</sup>

と考えられている。確かに両行事には類似した部分があるが、本部町などではシヌグは行われるが海神祭は殆ど行われず、臼太鼓もシヌグ舞と称する場合がある。<sup>(注28)</sup> また、国頭村のシヌグ伝承地では海神祭をシヌグん小と呼んだりシヌグ自体を大シヌグと呼び、行事も盛大に行うことから、単純に廃止されたとか、海神祭にシヌグが融合したとも言えないのではないかと考えられる。何れにせよ、臼太鼓関連行事の状況が西海岸と東海岸では一致していないことに注目する必要がある。

シヌグ・海神祭は国頭村では最も重要な行事であり、従って、これと共に伝承されてきた臼太鼓も伝承状況が比較的良好であると思われる。[表1]は安波を基準に国頭村の臼太鼓曲を同系旋律でまとめ、併せて伝承曲全体の状況を示したものである。

表 1 臼太鼓同系旋律一覧表 (安波を中心に)

東海岸沿いの伝承地	安波	安田	楚洲	奥	辺戸	与那	奥間	西海岸沿いの伝承地
	三年廻んぬ							
	宇地泊	宇地泊	宇地泊	宇地泊	宇地泊	宇地泊	宇地泊	
名護市大浦、瀬嵩、嘉陽 他	恩納	恩納	恩納	恩納	恩納	恩納	恩納	恩納村恩納、谷茶
名護市大浦	散山	散山						本部町備瀬、名護市安和 他
名護市嘉陽、与那城村屋慶名他	干瀬	あがまく	干瀬	干瀬	干瀬	干瀬	干瀬	大宜味村田嘉里、喜如嘉 他
名護市大浦	あたい亭1							本部町具志堅、渡久地、浜元
	あたい亭2		警作い	警作い	警作い	警作い		
石川市山城	大田名1				田名小堀	田名小堀		伊平屋村田名、我喜屋
勝連町比嘉、沖繩市知花	大田名2		下裳			あたい亭	いんちゃ亭	大宜味村喜如嘉
石川市石川	あぬ伊集		伊集ぬ木	伊集ぬ木	辺野喜	伊集ぬ木	伊集ぬ木	大宜味村田嘉里
勝連町比嘉、与那城村上原 他	ハリ諸鈍							本部町備瀬
	ちんなく							
名護市大浦・瀬嵩・汀間	ちんちゃぐ							
与那城町伊計、勝連町平敷屋他	永良部湯原							大宜味村田嘉里、喜如嘉 他
	安波	浦々				首里天加那志	すねー	(奥間クェーナ)
	あさぎ庭	いりは						
		ま浜		謝敷		屋嘉比		本部町具志堅、渡久地 他
勝連町平敷屋、南風原 他		金細工					金細工	大宜味村喜如嘉、名護市安和 他
石川市石川、与那城村饒辺 他			あんが川			安里八幡	芋ぬ葉	大宜味村喜如嘉、恩納村富着 他
			道ずねー	すねー				
			作田	作田				
	(石のちじ)				にしぬ大ぶて	謝敷		大宜味村田嘉里
				湖辺底			松田湖辺底	大宜味村田嘉里、名護市安和 他
		海ぬはんたぬ	あさぎ庭					
勝連町津堅		高離						
名護市嘉陽				運天屋				恩納村名嘉真、仲泊 他
				七尺				大宜味村喜如嘉、本部町瀬底 他
				池ぬ上				大宜味村喜如嘉
名護市大浦、嘉陽、汀間 他					ハリヨー			大宜味村喜如嘉、本部町安和 他
					加那ヨー			大宜味村田嘉里、喜如嘉 他
							虎頭山	恩納村仲泊
		警	思ゆらば	だんく	首里天加那志	ムチクン	風ぬたか風	
		海ぬささくさ	ハレー	巡り	謝敷	ディンゴー	ハリ山	
		ハリパコー	ちんちくらけ				北谷真牛	
		あさぎ庭					首里天加那志	

(備考)・——以下は各字独自の旋律である(臼太鼓に同系曲がないものはここに分類)。

・「節」は省略した。



これからわかるように、各字ともに伝承曲数は10曲以上ある。この曲数自体が他地域と比較してもかなり多い方である上、市町村単位で見た場合、これだけの曲数を伝承している例は他に見られない。従って、国頭村は全島的にみて最も臼太鼓の伝承状況の良い地域であるといえよう。

現在まで伝承されている臼太鼓曲には、地域的にまとまったレパートリー形成がみられる。例えば南部一帯の《那覇ぬちなち》——歌詞の意味や構成も判然としない曲であるにも拘らず——加えて糸満市の《くてい節》、石川市の《恩納節<sup>(注29)</sup>》《首里天加那志》、本部町の《マタあさぎ庭》《天ぬ群星》《本部上い水》などがそれにあたる。

国頭村では《宇地泊節》《恩納節》《干瀬節》が全字で、《あぬ伊集》が安田を除いた字で、また、安波では《あたい芋節》の第2曲にあたる《髻作い》([表1] 臼太鼓同系旋律一覧表 参照)が安田と奥間を除いた字でみられることから、少なくともこの5曲が国頭村臼太鼓のレパートリーと考えることができる。

5曲のうち、3《恩納節》5《干瀬節》8《あぬ伊集》は全島的にみられる曲で、臼太鼓の代表レパートリーでもあるが、この3曲がまとまって一群をなす分布は国頭村以外にはみられない。

- 《恩納節》は恩納岳や恩納に関わるものが歌い込まれた歌詞が多く、《あぬ伊集》は国頭村辺野喜がその花で名高いことから《辺野喜節》と呼ぶ地域もある。それぞれに北部地方に歌の発祥が問われる歌である。
- 《干瀬節》は「干瀬」とそこに留まる鳥に関連して恋を歌ったもので、この点からは発祥地が不明だが、続く歌詞で久米島の地名が歌われるため、あるいはそこが発祥かと考えられる。

以上の3曲に対して、2《宇地泊節》6-2《髻作い》系は国頭村にのみみられる曲である。

- 《宇地泊節》は宜野湾市の地名で、第1節ではこの浜の砂の美しさが歌われるが、第2節では辺戸上原が歌われるなど国頭村独自の歌詞となっている。旋律同系曲は三線古典曲にあるが、臼太鼓では国頭村の7ヶ字でしか伝承されていない。
- 《髻作い》は奥間・安田以外の5ヶ字で伝承されているが、現在までにまだ

他地域に同系旋律曲を見出すことができない。安田にはこの旋律の《髻作い》はないが、同様の歌詞は別旋律で歌われている。この歌詞は旋律同様、他地域にみられない歌詞であるから、安田では旋律伝承が途絶えた可能性もある。

その他の旋律では、安波にあるものとしては13《安波節》系（4曲／7ヶ字）、7《大田名節2》系（4／7）、《大田名節1》系（3／7）、安波にないものとして《ま浜》系（3／7）、《あなが川》系（3／7）が比較的多くみられる。<sup>(注30)</sup>なお、『山原の土俗』にみられる《石のちじ節》はその歌詞から、大宜味村田嘉里《石ん頂上》と同系であるとみられ、辺戸《にしぬ大ぶて》・与那《謝敷》の同系旋律である可能性が高い。

安波臼太鼓では国頭村のレパートリィは総て伝承され、7《大田名節1》《大田名節2》 13《安波節》など比較的多くの地域で伝承されている曲も共有している。その一方で、全体の曲数が多いため、1《三年廻んぬシヌグ》 6-1《あたい苧節》 9《ハリ諸鈍》 10《ちんなく》 11《ちんちゃぐぬ花》 12《永良部潟原》など、国頭村では安波でしかみられない曲も多数伝承されている。

## (2) 安田臼太鼓との比較

安波に隣り合っているとはいえ、安田の集落は陸路で約6キロ（山越えを含む）離れている。シヌグ・海神祭行事は、辺戸・奥・楚洲が旧暦7月の七夕後の亥の日から開始するのに対し、安波・安田では七夕前の亥の日を開始する。行事内容は伝承の途絶えたものも含め、山登り・船走らし＝ヤーハリコー・魚取り・猪取り・インコー・臼太鼓など類似したものが多く、両字の関係は深い。

この両字の関係に比べ、現在の両臼太鼓には異なる面が多い。

全体の構成では、両者とも終盤の数曲を「ちらし」あるいは「はな節」と呼び、他と区別していることで共通してはいるが、この部分のレパートリィは全く異なっている。また、前述の国頭村の共通レパートリィが安波では総て伝承されているのに対し、安田では《あぬ伊集》《髻作い》を欠き、《干瀬節》が《あがまく》という曲名になる——歌詞がかなり変化している——などの違

いが目立つ。

安田臼太鼓では、国頭村共通レパートリィの欠落・曲名の変化に加えて《散山節》でも旋律の欠落——上句旋律のみ伝承——<sup>(注31)</sup>があり、これらをまとめて考えると変化が大きい事がわかる。従って、安波と安田にのみ共通な《散山節》《あさぎ庭》＝《いりは》や、《恩納節》《宇地泊節》等の歌詞の一部のニヶ字のみの共通性等について考慮すれば、本来両者には共通点が多かった可能性がある。

### (3) 「はな節」の問題

一般に臼太鼓では比較的短い曲や軽い曲に対して「はな節」という呼称を用いることがある。また、自字の曲に対して他字の曲を「はな節」と呼ぶことで自字の曲の重厚さを示す場合もある。しかし、多くの地域で明確な基準がなく漠然とその呼称が使われているのに対し、安波では「はな節」は他の臼太鼓曲と明確に区別されている。<sup>(注32)</sup>このような区別は、与那城村宮城、国頭村安田・楚洲、名護市（旧久志村）大浦や大宜味村田嘉里でもみられる。

安波臼太鼓における「はな節」の性格を考察するために、先ず、こうした他の字での位置を概観してみたい。

#### ・与那城村宮城

ここでの「はな節」は「踊節」とも呼ばれ、円陣の舞踊の後で、あるいは全く独立して踊られる4～8名程度の縦列の舞踊を指す。曲目は他地域の臼太鼓・エイサーの同系曲など様々で曲数は多い。これらの舞踊は、一旦円陣を解いてから新たに開始されるもので、踊の隊形からも本来は別種の舞踊であったと考えられるものである。

#### ・大宜味村田嘉里

ここでの「ちらし」は、かつて田嘉里で独立して行われていた「七月舞」の一部を臼太鼓の後で引き続き行うもので、異なる芸能の曲であることが明確な一群の曲である。

#### ・名護市大浦

ここでの「ちらし」は、一旦臼太鼓の円陣を解いてから再度円陣を作って踊るもので、これだけを独立した形で演じる場合もある。テンポは他

の臼太鼓曲とは異なって軽快であり、踊り方にも遊び的な部分が多い。

- 国頭村安田

ここでは円陣を解かずにそのまま「ちらし」が開始されるが、その1曲目から急に踊が躍動的になり、続く2曲は七月舞・エイサーの同系曲で踊り方も西海岸の女性のみのも七月舞と同様である。

- 国頭村楚洲

「ちらし」は1曲だけで、安田の終曲の同系曲である。

以上の例から、安波以外の地域では、本来別種の芸能であったものが臼太鼓に含まれる際に「はな節」「ちらし」として他の臼太鼓曲と区別されたと考えることができる。

次に、安波の「はな節」の各曲の性格・全曲での位置づけを概観してみる。

- 9 《ハリ諸鈍》

テンポもゆったりとした産み字等の多い曲で、本来的な臼太鼓曲と共通する音楽性がみられるが、安波では「はな節」である。

- 10 《ちんなく》

他に例がないため比較できないが、音楽的には《ちんちゃぐぬ花》《あさぎ庭》との類似が指摘できる。

- 11 《ちんちゃぐぬ花》

大浦のちらし曲《ぎっそう》と同様に奄美八月踊《でっしょ》の同系曲で、沖縄での分布数や局所的な分布状況などから、新たに臼太鼓のレパートリィ化したものと考えられる。

- 12 《永良部潟原》

対句的な歌詞の曲で、音楽自体は古いものであると考えられるが、臼太鼓全体から見た場合には入退場曲である場合も多く、本来的な臼太鼓曲ではないのであろう。

- 13 《安波節》

退場の曲だが、与那や奥間では入場の曲である。

- 14 《あさぎ庭》

退場の曲だが、安田では入場の曲ということで、これも臼太鼓の本来的な曲ではない。

以上のように、安波の「はな節」には軽快な曲とそうではないものがあること、また七月舞・エイサーの同系曲は見られず、「はな節」として独立的でもないことが判る。

名護市安和の臼太鼓（全15曲17旋律）では9曲目でテンポが速くなり、音楽性もここで大きく変化する。<sup>(注33)</sup>このテンポが速くなった曲は「ちらし」とか「遊び歌」等と呼ばれるが、安波同様エイサー等の曲は含まれておらず、《永良部瀉原》の同系旋律や《ちんちゃぐぬ花》などと同様の4句完結的な旋律が多くなり、七五調の歌詞も多くみられる。

安波の「はな節」はこの安和の終盤の一群の曲と同質のもので、本来的な臼太鼓曲に対して、後から徐々にレパートリィに加えられていった曲に対する呼称なのではないかと考えられる。後からのレパートリィ化ということでは、与那城村の「はな節」も田嘉里等の「ちらし」も同様だが、安波や安和の曲の方が同系旋律が他地域の臼太鼓に多くみられ、エイサー曲等との重複もない。

一般的に安波・安和の「はな節」「ちらし」の同系曲は終盤にまとまっておらず、本来的な曲と同等に扱われ、その中に入り込んで渾然一体となっている。安波や安和等はある時から両者を区別する力が強く働くようになり、比較的古くからの伝承形態が保たれているのであろう。従って、この「はな節」を軸に臼太鼓曲を見直していくのも必要なことではなかろうか。

#### (4) 東海岸と西海岸

前述のように、同じ村内でもかつて東海岸側と西海岸側は陸路での行き来は不便であった。航路は東海岸側と西海岸側という両極に分かれており、経済圏も安波・安田・楚洲は東海岸側の与那原・泡瀬・平安座等と、それ以外の字は西海岸側的那覇・泊と結びついていた。国頭村におけるシヌグや海神祭の分布の違いにもこの点に関わっていると考えられるが、歌の伝播などについても関連があるかどうか、安波のレパートリィを中心にしながら考えてみたい。

[表1]のように、国頭村の共通レパートリィには東西の違いはなく、レパートリィ自体は他地域と明らかに異なっているため、国頭間切という単位で広まっていったと考えられる。

従って主に注目するのはこのレパートリィ以外の曲と他地域との関連であ

る。以下に各々の分布状況などについてまとめる。

- ① 大節的な曲としては《散山節》《あたい苧節1》《ハリ諸鈍》（《ハリ諸鈍》は安波では「はな節」と称されるが、音楽的には大節的な曲である。）が挙げられる。

・ 5 《散山節》

国頭村では安波と安田にしか見られない。東海岸側の他地域に目を向けると、名護市大浦、更に南の与勝や中部の内陸部、更に南部にその分布が広がっている。一方西海岸側では、本部町備瀬や名護市安和が北限である。従って《散山節》には東側のルートが関わっているようである。

・ 6-1 《あたい苧節》

《散山節》ほど多くの分布は見られないが、東海岸では大浦に見られ、西海岸では本部町に分布している。

・ 9 《ハリ諸鈍》

東海岸側では勝連町比嘉・与那城村上原に分布しており、特に上原では「踊節」である点が注目できる。西海岸側では備瀬にのみみられる。

- ・ 国頭村の安波以外で見られる大節的な曲には、奥の《池ぬ上》《七尺》《運天屋》等が挙げられる。《池ぬ上》は大宜味村喜如嘉に、《七尺》は喜如嘉及び本部町等にみられ、西側ルートでの伝播が考えられる。また、《運天屋》は東西にみられるが、奥の交易路からすれば西側からの可能性がある。

以上から、この一群には東海岸と西海岸との違いが見られ、安波では東海岸との関連の方が西海岸との関連より強く、併せて南側から北へという流れも見受けられるようである。

- ② 大節より歌詞進行がやや早い曲では、《大田名節1》《大田名節2》《永良部瀧原》《安波節》を挙げることが出来る。

・ 7 《大田名節1》《大田名節2》 13 《安波節》

他地域ではあまりみられず、むしろ国頭村内に複数の分布や比較的類似した分布状態があることから、かつては村内他地域でも伝承されていた

可能性がある。これらの曲と歌詞シラブルのリズムの点で共通性がある《金細工》《よーねぬ》《ヨーカナ》《東細》なども大半が北部に分布していることから考えると、これらは国頭郡北部と特定しないまでも北部地域を中心に南へと広がっていった可能性がある。このうち《ヨーカナ》にのみ、国頭村辺戸、大宜味村田嘉里・喜如嘉、本部町具志堅、名護市安和、恩納村名嘉真という西側のルートがみられる。

• 12 《永良部潟原》

国頭村では安波でのみみられるが、東海岸では与那城村・勝連町・石川市・具志川市に数多くの分布がみられ、一方の西海岸沿いにも大宜味村田嘉里を北限に、名護市安和や恩納村に分布がみられる。安波と歌詞内容が類似するのは与那城村伊計や恩納村谷茶だが、同系旋律や歌詞は奄美にもみられることから、伝播に関しては様々な可能性が考えられる。しかし、この場合も《永良部潟原》という曲名から明らかなように、歌の発生が沖永良部島を中心にした一帯という可能性があり、上記の曲と同様に北部一帯を中心に広がっていった可能性がある。

以上、この一群では、東西の海岸線による違いは必ずしも明らかでなく、むしろ、これらの歌が北部一帯での分布を示すことや、奄美との関連を持っているということに注目すべきであろう。

③ 歌詞進行が最も速い曲には《ちんちゃぐぬ花》《ちんなく》《あさぎ庭》がある。

• 10 《ちんなく》

同系曲が古典にしかみられない。

• 11 《ちんちゃぐぬ花》

名護市大浦・汀間・瀬嵩にあり、両者の関連を示唆する。同系曲は屋久島の踊歌や奄美諸島の八月踊にみられる。

• 14 《あさぎ庭》

隣字の安田にあり、安田の終曲に対して第1曲目として歌われる。

東側のルートであろうか。

何れの曲も大まかな旋律型（下行旋律）、歌詞のリズム対応、4句完結旋律

等に共通性がみられ、明らかに①②とは異なる音楽性やリズムがみられる。奄美や本土からの影響の強い一群ではないかと考えられる。

以上のように、曲の種類により伝播状況は異なるが、安波では他の国頭の字に比較し、東海岸沿いの歌の伝播の側面が強くみられるといえよう。

### (5) 奄美との関連

安波臼太鼓曲で奄美諸島との具体的な関連を示す曲は11《ちんちゃぐぬ花》12《永良部潟原》である。何れも沖縄にも同系旋律があり、安波曲と直接の関連を示すとは言いがたい。しかし《ちんちゃぐぬ花》は、沖永良部島和泊町手々知名の《でっしゅい》の旋律線との類似が他の沖縄曲より大きく、<sup>(注34)</sup>《永良部潟原》は歌詞中の1～10の数え方が奄美曲と同じであるなど、<sup>(注35)</sup>南奄美と何らかの関連を示す部分がみられる。国頭村では、他に奥の《巡り節》、楚洲の《ハレー節》《ちんちくらけー》等にも奄美との関連がみえ、探っていけば他にも関連がみられるのではないかと考えられる。

国頭村は、かつては陸路での中部、南部への交通は極めて不便であり、船による行き来の方が盛んであった。船での交通という点からすれば、本島中南部より、与論島や沖永良部島は近く、特に国頭村の北部や東海岸沿いでは行き来が盛んであったらしい。実際、国頭村でもかなりの与論船・沖永良部・道之嶋船の潮繫りの記録がみられる。<sup>(注36)</sup>臼太鼓にみられる一群の奄美との関連を示す曲にはこれらの影響があるのではなかろうか。更に言うならば、11《ちんちゃぐぬ花》は奄美では「大和のはやり」という歌詞が見られ、実際に屋久島小瀬田の《四ツ竹踊り歌》ともかなり類似していることから、<sup>34</sup>或いは大和から奄美を経て沖縄へというルートや、大和船の潮繫り等を通じて直接に流入する可能性もあったかもしれない。現在ではまだこれを明確に裏付ける例が多く見つかってはいないが、沖縄と奄美がかつて1つの文化圏であったことと併せて、この視点からも大和・奄美・沖縄を見る必要があるであろう。

### おわりに

以上のように安波臼太鼓の報告とそれらを軸に歌の伝播について考えてき



た。もとより、各地の臼太鼓が均質にレパートリィを増やしていったとは考えられず、現在の臼太鼓自体も明治以降かなり急速に衰退し、曲目などもかなり減少しているであろうことは容易に推測できる。しかし、その点を考慮してもなお、以下の点には注目して良いであろう。

- ① 安波臼太鼓の中核をなす大節的な曲で国頭間切単位で広がったと考えられる以外の曲には、東海岸経由の伝播と南から北への流れがみられる。
- ② 大節よりテンポの速いに曲は、分布状況や歌詞から、沖縄北部或いは奄美をも含んだ地域から流行りだしたのではないかと考えられるものがある。この中には、歌詞シラブルのリズムが共通する4句完結的傾向が強い1群が含まれる。
- ③ 歌詞進行が速い曲にも歌詞シラブルのリズムに一定のまとまりが見られ、4句完結的旋律、下行的な旋律線という点でも共通項が見出だせるが、これらは臼太鼓のレパートリィとしては数も少なく、最も新しい一群であろう。
- ④ 安波の「はな節」は、他地域のようにエイサーの曲目を含まず、一般の臼太鼓曲の同系旋律を含んでいることから、臼太鼓のレパートリィの形成を考える上で一つの示唆を与えてくれる。

筆者が初めて安波を訪れた1973年には、まだ急な斜面に茅葺きの家が並んだ安波のたたずまいの美しさに息をのんだものである。その後、臼太鼓を教えていただくために安波を訪れたのは、3年半後の1977年のことで、この時もまだ茅葺きの家は多かったように思う。現在では茅葺きの家屋は極僅かしかなく、安波の風景は変化してしまっただが、臼太鼓は伝承され続けている。

14曲16旋律（1993年には2曲だけ演唱されない曲があったが）という曲数は、円陣の臼太鼓曲としては名護市安和と並んで最も多い。音楽的にも様々なものが含まれ、踊も多様である。「陸の孤島」ということで古いものが残る一面で、海を介して奄美や大和も含む他地域の新しい流行の音楽を採り入れていった結果であろう。

この臼太鼓も、ここ15年ほどは伝承という難問を抱えてきた。その中で、

テンポを大幅に速めるなど変化もみられるが、変化は芸能伝承の必然として、これからも安波臼太鼓が村の人々によって伝承され続けていくことを心より願っている。

最後に、私たちの度重なる訪問に快く応じて下さった安波の人々に、そしてとりわけいろいろなことを教えて下さった今は亡き平識カメさんにこの場を借りて深く御礼申し上げます。

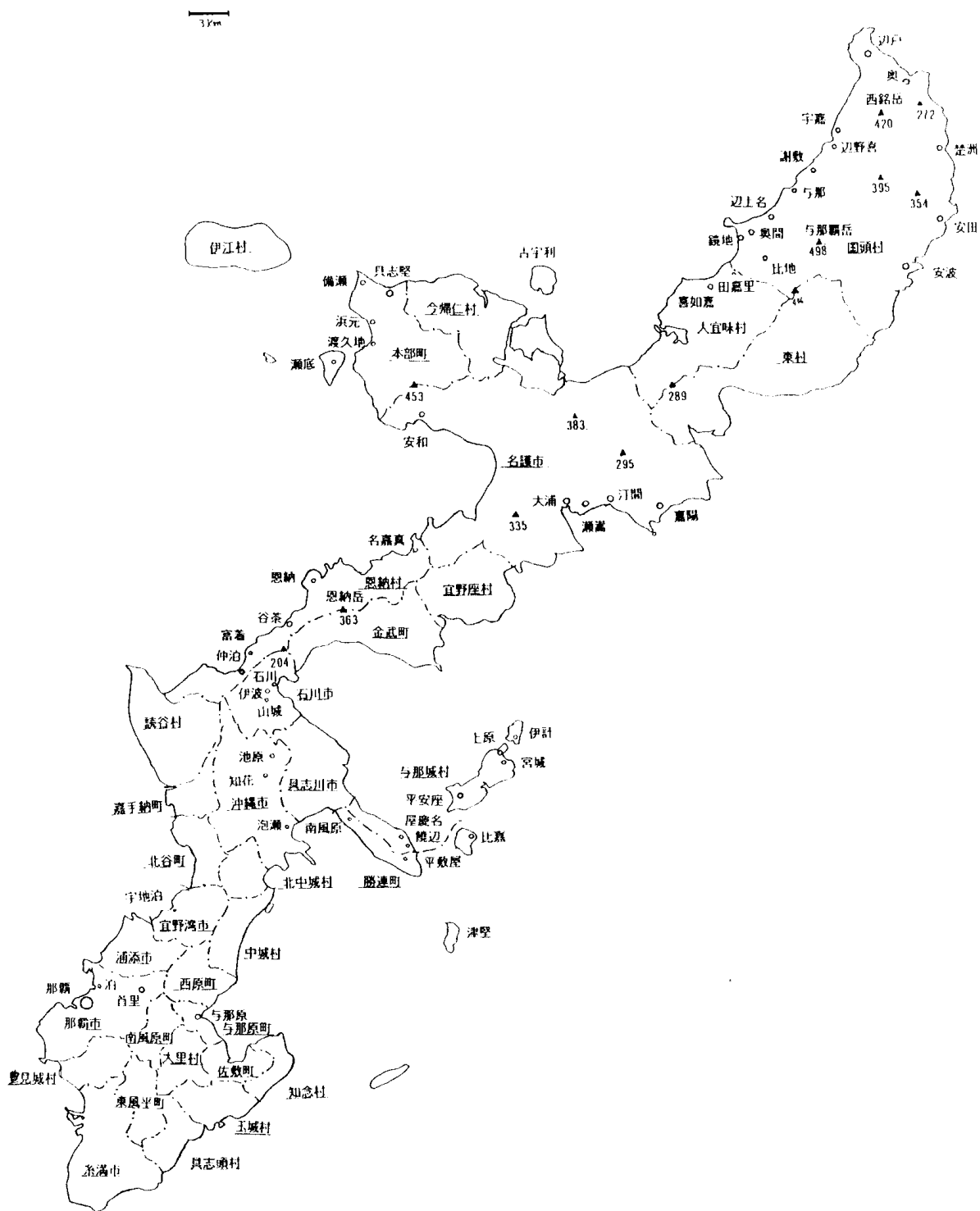
## 註

- 注1 天理大学教養部助教授
- 注2 宮城定盛『国頭村安田の「シヌグ考」』（1976） p.12の記述や、氏から実際うかがった当時の状況による。
- 注3 国頭村役所編集『国頭村史』国頭村役所（1967） p.514 （以下『国頭村史』）
- 注4 宮城栄昌『沖縄のノロの研究』吉川弘文館（1979）の自序において、安波を「陸の孤島」と最初に新聞に書いたのは氏であると書かれている。
- 注5 『国頭村史』 p.327。
- 注6 『国頭村史』 p.508。
- 注7 『国頭村史』 p.329。
- 注8 国頭村謝敷で収録した《国頭口説》。東京芸術大学民族音楽ゼミナール『沖縄民謡採譜集 I 国頭 上』 p.225参照。1973・1974年当時、東京芸術大学民族音楽ゼミナールは東京芸術大学民俗音楽ゼミナールとして沖縄民謡調査を行っている。
- 注9 『国頭村史』 p.140、 p.328等を参照。
- 注10 『国頭村史』別冊によれば、最も人口が多いのは1950年で116戸625人で、以後徐々に減少し、1965年には90戸435人となっている。近年戸数は大きく減少していないのに人口が減少しているのは、若い人の人口が減少していることによるのであろう。
- 注11 『国頭村史』 p.324、 p.327や、宮城鉄行『国頭村安田の歴史とシヌグ祭り』1993 未来工房 pp.31-33 等。
- 注12 宮城栄昌 前掲書 p.343-344。
- 注13 宮城栄昌 前掲書 p.344や、国頭村役所『国頭村史』別冊 p.42に安波のシヌグの山登りについての記述がある。当山スミさんによれば、1977年の時点で既に「70年くらい前に山登りはしなくなった」ということである。近年国頭村奥ではいったん行われなくなったこの行事が復活されたが、安波ではまだその兆しはない。
- 注14 島袋源七『山原の土俗』は昭和4年に郷土研究社から出版。本論では『日本民俗誌大系 第1巻 沖縄』1976 角川書店に復刻されたものを使用。 p.312。
- 注15 魚取りや船走らしは『国頭村史』等には海神祭の行事として記されているが、今では行事内容も変化し、シヌグの際にも行われるようである。

- 注16 うんじょーは、国頭村与那等で収録した《国頭口説》（東京芸術大学民族音楽ゼミナール 前掲書 p. 328-330）で歌われる「御奉行御宿や 安波大屋」の安波大屋があった場所である。
- 注17 1回目の曲目は《宇地泊》《恩納》《散山》、2回目、3回目は《三年》《宇地泊》《恩納》《散山》《干瀬》《あたい苧1》《あたい苧2》《大田名1》《大田名2》《沈仁屋久》《永良部潟原》《あぬ伊集》であった。なお、3回目は《あぬ伊集》《永良部潟原》の順であった。《ちんちゃぐ》《安波》は前日のぬん殿内庭での練習では行われたがシヌグ当日には行われなかった。なお、シヌグの状況は主として小林幸男撮影のビデオと取材により、その後に筆者が安波共同店で聞いたり、或いは電話で確認した内容を含む。
- 注18 曲の順番は平識カメさんによれば《宇地泊》《恩納》《散山》は決まっているが、その後は必ずしも決まっていなかった。しかし、1974・1977・1993年の何回かの演唱から一応の曲順を決めた。このため、後述の修士論文資料の順番とは幾らか異なっている。なお、1977年収録の故老テープのダビングは《宇地泊》《恩納》《散山》《干瀬》《大田名1》《大田名2》《あたい苧1》《あたい苧2》《伊集》の順で、実況では《大田名》と《あたい苧》が入れ替わっている。
- 注19 平識カメさんによれば以下の曲は「はな節」と呼ばれ、これまでの曲と区別されている。《ハリ諸鈍》は実際にシヌグの中で歌われている録音はないが、大節的であることや1974年の試演の中で歌われている状況から「はな節」の最初に置いた。《沈仁屋久》《ちんちゃぐ》《永良部潟原》は1974年の実況の抜粋テープの順による。《安波》《あさぎ庭》もシヌグでの演唱はないが、出羽ということで最後に置いた。
- 注20 島袋源七 前掲書 p. 312。
- 注21 島袋源七 前掲書 p. 315。
- 注22 宮城栄昌 前掲書 p. 359。
- 注23 東京芸術大学民族音楽ゼミナール 前掲書 pp. 2-18。
- 注24 昭和52年度東京芸術大学音楽研究科修士論文。
- 注25 音階の分析は、小泉文夫『日本伝統音楽の研究1』（音楽之友社 1960）で示された4種の音階の基本構造を基にしながら、3度堆積等他の考え方も応用した。
- 注26 久万田晋「奄美民謡旋律のリズム構造」『日本の音の文化』（1994）第一書房。

- 注27 国頭村役所編『国頭村史』別冊 pp.40-41。
- 注28 本部町具志堅では臼太鼓とは呼ばず「シニグ舞」と呼ぶ。
- 注29 臼太鼓では《恩納節》と呼ばれる歌には2系統の旋律があり、この曲は国頭村で伝承されている《恩納節》異なる旋律であるため\*印を付した。
- 注30 表と対応しやすくするため、曲名は表の最も左側の曲名で代表させた。
- 注31 《散山》については小林公江「臼太鼓における〈散山節〉」『関西楽理研究X』関西楽理研究会（1993）参照。
- 注32 故老の平識カメさんは両者を明確に区別していたが、1993年の演唱は「はな節」が《あぬ伊集》より先に歌われることが多く、現在の伝承者がこの両者を区別しているかどうかには疑問がある。
- 注33 安和の臼太鼓については、小林公江「名護市安和の臼太鼓歌」『大阪女子短期大学紀要』第15号 大阪女子短期大学学術研究会（1990）参照。
- 注34 平成5年度科学研究費補助金研究成果報告書『南西諸島の音楽芸能における文化複合の総合的研究』p.56の《でっしょ》の比較譜参照。
- 注35 詳しくは、小林公江「永良部瀉原」『関西楽理研究VI』関西楽理研究会（1989）参照。
- 注36 『国頭村史』p.140。


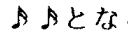
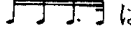
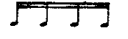
安波口太鼓関連地図



## 資料1 臼太鼓の楽譜

この楽譜は1977年に収録した古老の演唱（データの参照）を中心に、他の演唱および、1993年のシヌグ当日と前日の練習の録音を加えて採譜し、作成したものである。

### 凡例

1. 楽譜を確実なものにするために、できるだけ多くの演唱を採譜し、偶然に生じたと思われる音価や音高を排除するようにしながら楽譜を作成した。また同じ理由から、楽譜は必ず採譜者以外の者の校閲を経ることとした。  
採譜者：小林公江 校閲者：小林幸男
2. テンポは、音楽の性格上、歌唱のみのもではなく実際に踊っている時のものを採用した。なお、1977年のテンポを優先し、1993年のテンポは（ ）で示した。
3. 太鼓は踊りと深くかかわっているため、録画を見て踊り方を確認した上で記譜したが、歌のリズムと関係なく同じパタンを繰り返すため、太鼓のパタンとして楽譜の下段に1パタンのみ記した。なお、1977年と1993年でパタンが異なる場合は、1977年、1993年の順で記した。
4. 拍子は4分の2拍子を基本に、歌詞や他字の同系旋律を考慮に入れて区切った。
5. 楽譜は、調号を用いず記すことを基本としたが、旋律同系曲との関連で調号を用いたものもある。
6. 実音の音高に関しては楽譜の下段に“記譜は実音より長2度低い”という形で記した。1977年の音高と1993年の音高が異なる場合は、上段を1977年、下段を1993年とした。
7. 半音より狭い音程は↑↓で記した。↑↓は♯♭とは違い、それが付いている音にのみ有効である。
8. 音高が不確定な時には×で記した。
9. ヴァリエーションがあるときには、頻度の少ない方、あるいは1993年の演唱を該当部分を含む小節ごと主楽譜の上段に取り出し、互いに点線で結んで関連を示した。1993年の演唱で生じたヴァリエーションは★印を付けて示し、1993年にのみ見られる四分休符は▼で位置のみ示した。また、以下の点は1993年の演唱全体に見られる傾向で、特に楽譜には示していない。
  - ①  は  となることが多い。
  - ②  は  となることが多い。
  - ③ 楽譜中に記した装飾音符は殆ど見られない。
10. 歌詞の途中に出てくる→はその部分を歌・太鼓・踊りがとばすことを表す。
11. 地謡以外の人が歌う掛け声や囃しは、五線の上の┌─┐で示した。
12. ( ) のついた音符は必ずしもいつでも歌われるとは限らないことを表している。また、( ) のついた歌詞は産み字や重ね字を示している。

## 1. 三年まんぬしぬぐ

♩ = 42 (♩ = 52-54)

みつ - ま - ん - - - - - め - - - - - ヨ - (オ) し - め - - - - -

★ --- < --- ヨ --- ふあ - ち --- ば - ち --- - どう --- ヨ - (オ) や - に --- や - ヨ --- ゆ - く --- ヨ ---

や - ゆ --- - - - - - る --- ヨ --- (オ) み - ちゆ - や --- ま - さ --- - - - - - い --- ヨ ---

★ ま --- - - - - - さ - い - - - - - ハリ - ヨ --- - (お)ンナ

太鼓のバタン  $\frac{4}{4}$  記譜音は、録音より短6度高い。

(備考) この楽譜の歌詞は1993年の演唱による。1977年の平識カメさんの演唱では「やにやゆくまさい」の「やにや」は「まさい」と同旋律であり、「ゆく」部分は欠落している。

## 録音・録画データ

## 1. 1977.8.19

平識徳子所蔵のテープ (1976.5.5録音) のコピー  
 演唱者：平識カメ、比嘉カマ、新垣ウト、比嘉ヒロ  
 採集者：小林公江・小林幸男・金城厚

## 2. 1977.8.21

平識善光宅にて (録音のみ)  
 演唱者：平識カメ  
 採集者：小林公江・幸男

## 3. 1977.9.2.

平識善光宅にて (録音・録画)  
 演唱者：平識カメ  
 採集者：小林公江・幸男

## 4. 1993.8.21

ノロ殿内庭にて  
 (録音・録画) ……練習  
 演唱者：安波婦人会のみなさん  
 採集者：小林幸男・久万田晋

## 5. 1993.8.22

あさぎ庭・うんじょ一庭にて  
 (録音・録画) ……当日の実況  
 演唱者：安波婦人会のみなさん  
 採集者：小林幸男



## 2. 宇地泊節

♩ = 42 (♩ = 50-52)



1. うち どう --- まま --- --- い --- ま --- --- さ --- --- 7  
 2. ひ どううい --- ばま --- --- る --- ぬ --- --- ぶり --- --- 7  
 ま --- --- --- に --- う --- --- ぶり --- --- アラユイサーユイサ



(ア) - く - - マ - タ - てい - - - だ どう - - ま - - (ア) - ち -  
 (ウ) - る - - マ - タ - に - - - ぬ - - な - -  
 (ウ) - てい - マ - タ - く - - - る ま - - う - - (ウ) - てい -  
 (イ) - てい - マ - タ - み - - - な だ - - う - -

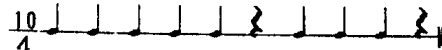


ら - - - - す - - - - る う - - - ち つ - - (ア) - ら -  
 あ - - - - ぐ - - - - でい う - - - だ が - - (ウ) - とう -



び - ウネ - ヤラ チョン - ド  
 ち - ウネ - ヤラ チョン - ド

太鼓のバタン



記譜音は、録音より短2度低い。  
 記譜音は、録音より長2度高い。

### 録音・録画データ

#### 参考テープ

1. 1974.9.2

安波公民館にて

演唱者：平謙カメ、玉城ウシ他

採集者：龍村、高見、本田、早島

東京芸術大学民族音楽ゼミナール所蔵

(R74K9)

2. 1974.8.29

ノロ殿内にて

演唱者：平謙カメ、玉城ウシ他

採集者：龍村、早島

東京芸術大学民族音楽ゼミナール所蔵

(R74K7...R74K3より抜粋)

### 3. 恩納節

♩ = 42-44 ( ♩ = 52-54)



1. うん - な ヨ - だ --- き - ヨ - ぬ --- - - - ふ --- てい -  
 1R. うん - な ヨ - み --- や - ヨ - ら --- - - - び --- ぬ -  
 2. たん - ち ヨ - か --- ら - ヨ - う --- - - - ん --- な -  
 2R. く - とう ば ヨ - か --- わ - ヨ - ら --- - - - す --- る -



ヤ リーヤ --- リ - - ヨ アラ ユイサー-ユイサ う --- し --- く ---  
 ヤ リーヤ --- リ - - ヨ アラ ユイサー-ユイサ てい --- ふ --- い ---  
 ヤ リーヤ --- リ - - ヨ アラ ユイサー-ユイサ さ --- ち --- どう ---  
 ヤ リーヤ --- リ - - ヨ アラ ユイサー-ユイサ み --- じ --- ぬ ---

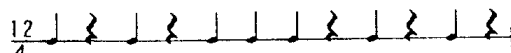


だ --- い --- - - - み - り --- - - - ば - ちゆ ---  
 ひ --- ざ --- - - - み - と --- - - - る - う ---



ら --- - - さ --- - - - イエ イス リー  
 ら --- - - み --- - - - イエ イス リー

太鼓のバタン



記譜音は、録音より長2度高い。

### 5. 干瀬に居る節

♩ = 46 ( ♩ = 54)



1. び し - に --- - び --- - - - - る --- - - - - - どう - い - - や -  
 1R. わ み - や --- - あ --- - - - - か --- - - - - - ち - - - - - ち - ぬ -  
 2. び し - ぬ --- - う --- - - - - ち --- - - - - - く - - - - - い - ぬ -  
 2R. てい ち や よ --- - う --- - - - - み --- - - - - - わ - - - - - ら - び -



ヨ - ウネ - み --- - - つ --- (ウ) す --- - - う - ら - み ゆ --- る  
 ヨ - ウネ - どう --- - - い --- (イ) どう --- - - う - ら - み ゆ --- る  
 ヨ - ウネ - し --- - - く --- (ウ) ぬ --- - - ゆ - てい ち ちよ --- ん  
 ヨ - ウネ - し --- - - く --- (ウ) し --- - - き - が - い か --- な



太鼓のバタン

記譜音は、録音より短2度低い。  
 記譜音は、録音より長2度高い。

### 4. 散山節

♩ = 46 ( ♩ = 54-56 )



1. さん - や - ま - - - - - め - - - - - く - - - - - ちよ (オ) - - - -  
 2. くちよ - くわ - く - - - - - い - - - - - ち - - - - - ちよ (オ) - - - -  
 3. すみ - てい - す - - - - - み - - - - - ゆ - - - - - ら (ア) - - - -



くわ - ス リー に - - - し - - ん - - - と (オ) - - - - め - - -  
 てい - ス リー う - - - どう - る - - - か (ア) - - - - ん - - -  
 ば - ス リー あ - - - さ - - - ず - - - み (イ) - - - - や - - -

★ や - ん ば -



く - - ちよ - くわ アラ ユイヤサ ヌ  
 ち - - む - や アラ ユイヤサ ヌ  
 ん - ばで む め アラ ユイヤサ ヌ  
 で - - む - め

あじ - が - - - ゆ - - - ん - - -  
 がら - し - - - あ - - - か - - -



な - - - - - ら (ア) - - - - - め - - - - - わ - - - ゆ - - - に  
 ば - - - - - に (イ) - - - - - め - - - - - く - - - - - - - - - - - とう - - - - - なる  
 ★ わ - - - ゆ - - - - - に - - - な - - - ゆ - - - - -



な - - (な) ゆ - - - - - る - - - - - サ ユーヨ (オ)ンナ  
 す - - (す) み - - - - - よ - - - - - サ ユーヨ (オ)ンナ  
 ヨ - - な - -



記譜音は、録音より短3度高い。  
 記譜音は、録音より長2度高い。

### 6-1. あたい芋節 1

♩ = 42-44 ( ♩ = 54-56 )

1. あた	い	う	ぬ	ヨ	な	か	く	ま	し	
1R. やま	とう	め	る	ヨ	さ	とう	が	どう	ち	
2. いん	ちや	う	や	ヨ	う	み	ば	わ	どう	
2R. ひ	とう	どう	ゆ	む	ヨ	さ	とう	が	ぬ	た

ら	ヨ	ひ	き	ユイ	サ	ヨ	ス	ラ	サ	ン	ナ	
す	ヨ	ふあ	か	ま	ユイ	サ	ヨ	ス	ラ	サ	ン	ナ
が	ヨ	た	み	ユイ	サ	ヨ	ス	ラ	サ	ン	ナ	
み	ヨ	な	ゆ	が	ユイ	サ	ヨ	ス	ラ	サ	ン	ナ

ヨ	イ	ヤ	サ	サ	テ	イ	ム	ツ	ラ	ヨ	イ
ヨ	イ	ヤ	サ	サ	テ	イ	ム	ツ	ラ	ヨ	イ
ヨ	イ	ヤ	サ	サ	テ	イ	ム	ツ	ラ	ヨ	イ
ヨ	イ	ヤ	サ	サ	テ	イ	ム	ツ	ラ	ヨ	イ

記譜音は、録音より短3度高い。  
記譜音は、録音より長2度高い。

### 6-2. あたい芋節 2

♩ = 42-44 ( ♩ = 54-56 )

1. ス	レ	か	し	ら	ち	ん	く	い	け	よ	ち	ん	ヨ	ス	レ
1R. ス	レ	わ	み	や	や	ま	と	う	や	ど	う	か	い	ス	レ
2. ス	レ	う	ち	ち	よ	き	ば	な	ゆ	み	ス	レ	ス	レ	レ
★ ス	レ	わ	み	や	や	ま	と	う	や						

--	ん	ば	さ	ぎ	ん	か	ん	て	い	ス	レ	ザ	ン	ナ
--	わ	か	ね	と	う	い	が	ゆ	み	ス	レ	ザ	ン	ナ
--	さ	ぎ	と	う	き	ば	な			ス	レ	ザ	ン	ナ

ヨ  
イ  
ヨ  
イ  
ヨ  
イ

記譜音は、録音より短6度高い。

太鼓のボタン  $\frac{12}{4}$

7-1. 大田名節 1

♩ = 48 (♩ = 58-60)

1. う ふ だ - な -- ぬ -- ゆ - み (イ) - や ヨ -- な い ぶ - さ -- や -  
 2. あ さ ぬ - い -- す -- み - じ (イ) - や ヨ -- と う ち ど う ち -- ど う  
 3. ぬ は ぬ - ち -- り -- が - と う い (イ) - や ヨ -- だ な ぐ - む -- い ぬ -

あ - し が - ヒ ヨ - ス リ あ - さ - ぬ - い す - み -- じ (イ) や ヨ -  
 く - む る - ヒ ヨ - ス リ う - ふ - だ - な ぬ - ゆ -- み (イ) や ヨ -  
 が - と う い - ヒ ヨ - ス リ な - さ - ち - ち り - な -- ら (イ) や ヨ -

く -- み ぬ - あ -- -- わ - り -- ヨ ン ジ ヨ ス リ - ヨ ン ジ ヨ  
 な -- い ど う あ さ -- -- び - る -- ヨ ン ジ ヨ ス リ - ヨ ン ジ ヨ  
 だ -- な ぬ - な -- -- ら - び -- ヨ ン ジ ヨ ス リ - ヨ ン ジ ヨ

7-2. 大田名節 2

♩ = 48 (♩ = 54-60)

1. あ は ゆ - ぐ り - ぬ -- -- や - ま (ア) - よ ス リ -- あ わ り -- -- や -- ま  
 2. ゆ る じ - て - る -- -- や - ま (ア) - よ ス リ -- あ わ り -- -- や -- ま

や - く と う ス ン ド ス リ - エ イ ス リ ス リ - む - し る - ち ょ - - ん  
 や - く と う ス ン ド ス リ - エ イ ス リ ス リ - む - し る - ち ょ - - ん

ね - ら --- - ぬ ス リ -- わ - ら び - -- む - し -- る - - ヨ (オ) ン ナ イ  
 ね - ら --- - ぬ ス リ -- や - が に - -- む - し -- る - - ヨ (オ) ン ナ イ

太鼓のバタン  $\frac{8}{4}$

記譜音は、録音より短3度高い。  
 記譜音は、録音より短2度高い。

### 8. あぬ伊集節

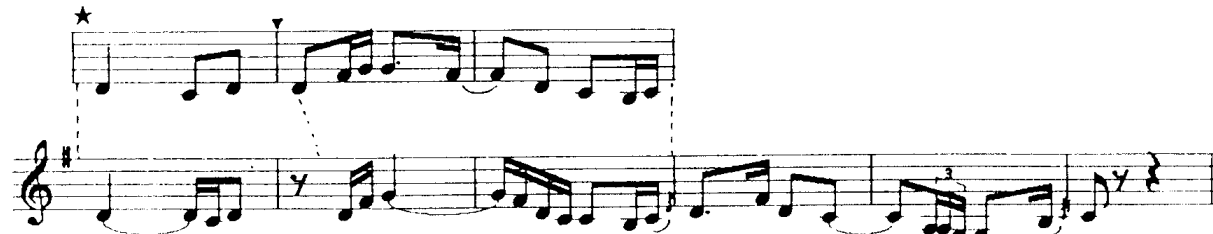
♩ = 42-44 (♩ = 54-56)



1. あ ぬ い - - - - - ず - - - - - ぬ - ヨ - - ふあ - - な (ア) - - -  
 1R. わ ぬ ん - - - - - い - - - - - ず - ヨ - - や - - と (オ) - - -  
 2. う む ゆ - - - - - ら - - - - - ぼ - ヨ - - さ - - と (ウ) - - -  
 2R. し ま や - - - - - ひ - - - - - ら - ヨ - - じ - - ま (ア) - - -



や - - シ ターリ - ヌ ナ イチャ ス ガ - - - - - ま - - し - ら - -  
 てい (ヨ) - - シ ターリ - ヌ ナ イチャ ス ガ - - - - - ま - - し - ら - -  
 め - - シ ターリ - ヌ ナ イチャ ス ガ - - - - - し - - ま - か - -  
 や - - シ ターリ - ヌ ナ イチャ ス ガ - - - - - み - - な - と - う - -



ば - - - (ア) - な - - - さ - つ - い ヨ - サ - ア シターリ - ヌ ヨ  
 ば - - - (ア) - な - - - さ - か - な ヨ - サ - ア シターリ - ヌ ヨ  
 め - - - (エ) - てい - - - い - も - り ヨ - サ - ア シターリ - ヌ ヨ  
 め - - - (エ) - な - - - ち - ヨ - ン ナ - サ - ア シターリ - ヌ ヨ

太鼓のバタン  $\frac{12}{4}$

記譜音は、録音より短3度高い。  
 記譜音は、録音より長2度高い。

### 9. ハリ諸鈍

♩ = 46



1. ハ リー す - - - - - ちよ - ん - - ヨ - - な - - - が (ア) ヨ - - は - (は) -  
 1R1 ハ リー じゃ - - - - - ち - - ヨ - - い - - - た (ア) ヨ - - び - (び) -  
 1R2 ハ リー う - - - - - ちゃ - い - - ヨ - - ふい - - - く (ウ) ヨ - - な - (な) -



ま - - - - - ぬ ハ リー ヒ - - - - - ヤ - - ル - - ガ - ヨ - - - - - ヘイ  
 し - - - - - ぬ ハ リー ヒ - - - - - ヤ - - ル - - ガ - ヨ - - - - - ヘイ  
 み - - - - - ぬ ハ リー ヒ - - - - - ヤ - - ル - - ガ - ヨ - - - - - ヘイ

太鼓のバタン  $\frac{8}{4}$

記譜音は、録音より完全4度高い。

(備考) この歌は太鼓付きの演唱がないため、太鼓のバタンは類似する踊(《大田名節》)の太鼓バタンから類推したものである。

### 10. ちんなく節

♩ = 48-50 (♩ = 52-54)



1. ちんなく ぬ --- は - じ - み た - が し は じ --- み - た - が - チンナ ク - う - く ま に - せ -
2. あ - は ぬ み な --- と う ぐ わ に み - じ ん ぐ わ ぬ --- ち - ち よ せ - チンナ ク - わ し た が て る が ま
3. ぐ し く ん め ぬ --- い - ち - び ま - か い め が --- い - ち - び - チンナ ク - わ し た が て る が ま



- す - た - が - な - う き - と う た - せ - ヒヤルガ - チンナ ク シッシッシ
- つ - く - て い す ぐ い か - み じ ゅ ん - ヒヤルガ - チンナ ク シッシッシ
- つ - く - て い む い ん か - い ち - び - ヒヤルガ - チンナ ク シッシッシ



記譜音は、録音より完全4度高い。  
記譜音は、録音より長2度高い。

(備考) 1993年には下句の繰り返しは行われていない。

### 11. ちんちやぐぬ花

♩ = 52 (♩ = 54-56)

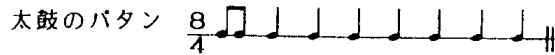


1. ちんちやぐ ぬはな や - う - て へ ま た さ ちゆ - い みや - ら - び ぬはな や -
2. ていぬむ りぶし や - ゆ - み ば ゆ ま り ゆ - い うや - ぬ - ゆ しぐとうや -
3. わ - ら び ぐ ぬいそ さ - た - ん とうい とそ が - ち みや - ら - び ぬいそ さ -



記譜音は、録音より完全4度高い。  
記譜音は、録音より長6度高い。

- さ ちるちゆ - ふあな ウマデン ス ナ
- ゆ みやな - らぬ ウマデン ス ナ
- じ ぐやで - むぬ ウマデン ス ナ



(備考) 1993年には下句の繰り返しは行われていない。

### 12. 永良部湯原

♩ = 46-48 (♩ = 58-60)

7. ち - みち - ゆち -

1. い - ら -- ぶ	-- か - た -- -- ば - る -- --	に	サ - サ -
2. う - き -- み	-- じゅ - ん ぬ - ゆ - て い ち - ちよ	ん	サ - サ -
3. う - る -- じ	-- ん - が -- -- ま - は - だ -	う	サ - サ -
7. てい - ち -- た	-- ち み ち ゆ ち い ち - ち - む -	ち	サ - サ -

に -- し - ぬ	---- か -- た - ば - ー - る -	に	- ヒックリ チュラ ヨ ハリ
う -- き - は	---- だ -- ら ン ゆ て い - ち - ちよ	ん	- ヒックリ チュラ ヨ ハリ
わ -- が - う	---- す -- が - どう ち -- ー - ン		- ヒックリ チュラ ヨ ハリ
な -- な - ち	---- や -- ち - く - ぬ - ち - とう		- ヒックリ チュラ ヨ ハリ

チュラ ヨ - ハリ ウ ム - シール -	ヤ スリ	フックラ サ - ヌ -	ヤ スリ
チュラ ヨ - ハリ ウ ム - シール -	ヤ スリ	フックラ サ - ヌ -	ヤ スリ
チュラ ヨ - ハリ ウ ム - シール -	ヤ スリ	フックラ サ - ヌ -	ヤ スリ
チュラ ヨ - ハリ ウ ム - シール -	ヤ スリ	フックラ サ - ヌ -	ヤ スリ

太鼓のボタン  $\frac{7}{4}$

記譜音は、録音より短7度高い。  
記譜音は、録音より減5度高い。

### 14. あさぎ庭

♩ = 52-54

1. あ さぎま に - ン ち てい -	ち らか く す - い な - ぐ	- っ - りどし ま - じ - ま -- ぬ
2. あ さぎま ぬ - あ く た -	た がさね く - な ちえが	- わ - したみ や - ら - び -- ぬ

あ まいへ ず - ら  
さ ねく な ちえ さ

太鼓のボタン

記譜音は、録音より長2度低い。



### 13. 安波節

♩ = 54 (♩ = 56)

1. あ	は	ぬ	ぬ	---	ん	ど	ぬ	---	ち	ハ	リ	く	---	が	に
1R. く	り	が	あ	---	ち	が	り	---	ば	ハ	リ	み	---	る	く
2. あ	が	り	あ	---	ち	が	り	---	ば	ハ	リ	し	---	み	な
2R. か	し	ら	ゆ	---	て	た	ぼ	---	り	ハ	リ	わ	---	う	す

★ 1. あ	は	ぬ	ま	は	---	ん	た	---	や	ハ	リ	ち	---	む	す
1R. う	く	ぬ	ま	ち	---	し	た	---	や	ハ	リ	に	---	な	し

ど	う	---	る	さ	ぎ	---	て	い	♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪
ゆ	れ	---	が	い	が	---	ふ	い	♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪
が	ら	---	し	ど	く	---	し	し	♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪
ら	ど	---	く	ど	く	---	る	る	

メ	ユ	スツ	サ	ミ	ヤ	ラ	ビ	タ	(ン)
メ	ユ	スツ	サ	マ	ー	グ	シ	カ	(イ)
メ	ユ	スツ	サ	ミ	ヤ	ラ	ビ	タ	(ン)
メ	ユ	スツ	サ	マ	ー	グ	シ	カ	(イ)

太鼓のバタン

記譜音は、録音と同度である。  
記譜音は、録音より短6度高い。

## 資料2 臼太鼓の歌詞

## 凡例

1. 歌詞は漢字まじりの平仮名で記し、掛け声や囃しは漢字まじりの片仮名で記した。
2. 共通語訳は地元の方々の解説を参考にしながら作成したが、よく判らないところは（意不祥）とした。
3. 訳のために補った言葉や補足説明は（ ）で示した。
4. 歌詞中の { } は産み字を示している。
5. 歌詞中の < > は踊り手による囃し詞を示している。
6. 1977年の演唱を基に作成したが、1974年、1993年の演唱が異なる場合や、補足説明が必要な場合は該当曲の最後に\*を付して説明を加えた。

## 1. 三年廻んぬしぬぐ

<sup>みつ</sup>三年廻<sup>ま</sup>んぬヨ{オ}しぬぐヨ はちばちどろヨ{オ}やゆるヨ  
<sup>や</sup>来年<sup>に</sup>やヨ{オ}ゆくヨまさいヨ <sup>みち</sup>三年<sup>ち</sup>やまさい ハリヨンナ

1年おきのシヌグは八分目である。来年はよりまさって（すばらしく）

再来年は（更に）まさって（すばらしくなりますように）。

\*この歌詞は1993年の演唱による。1977年の平識カメさんの演唱は「みつまんぬしぬぐ はちばちどろ 来年やまさい 三年やまさい」（産み字と囃し省略）だが、歌詞説明時は上記のように琉歌の短歌となっている。

## 2. 宇地泊節

1. <sup>うちどろまい</sup>宇地泊<sup>ま</sup>まさ{ア}ぐ マタ <sup>ていだ</sup>太陽<sup>ど</sup>ろま{ア}ぢらす  
<sup>うちまち</sup>御月<sup>ら</sup>紛<sup>ら</sup>す <アラユイサーユイサー>{ウ}る マタ <sup>な</sup>にしぬ<sup>ら</sup>女{ア}童  
 ウネ ヤラチョンド

宇地泊の砂は（きらきらと輝いて）太陽を紛れさせる。

（きらきらと輝いて）月を紛れされる にしの娘（西銘の娘の意か）。

2. <sup>ひどろ</sup>辺戸<sup>い</sup>原<sup>い</sup>上<sup>はる</sup>上<sup>ぬ</sup>てい、くるま<sup>う</sup>ちあ<sup>ぐ</sup>でい、う<sup>ち</sup>ぢ<sup>や</sup>が<sup>ま</sup>に<sup>う</sup>下<sup>り</sup>てい、<sup>みな</sup>日<sup>な</sup>涙<sup>だ</sup>落<sup>ら</sup>と<sup>う</sup>ち

辺戸上原（国頭村辺戸と宜名真の間にある野原）に上って、（不詳）しあぐみ、うだがま（宇佐浜のことか）に下りて涙を落とした。

3. 夜<sup>ゆる</sup>と<sup>み</sup>思<sup>あ</sup>ば明<sup>なり</sup>きる 夏<sup>なつ</sup>ぬ夜<sup>ゆる</sup>やしが<sup>むねがたいぬく</sup> 物語<sup>と</sup>残<sup>ら</sup>す 鳥<sup>と</sup>ぬ恨<sup>うら</sup>み

夜だと思っていたら明けてしまう夏の（短い）夜だけれど、（夜明けを告げ彼女との）語らいを残す鳥が恨めしいこと。

\*1993年の演唱では第3節の歌詞が第2節に、第2節の歌詞が第3節となっている。

\*島袋源七『山原の土俗』には「<sup>1</sup>うちるまいるまい、又<sup>てだ</sup>太陽とまじらす 西<sup>な</sup>ぬ宮<sup>らび</sup>童<sup>ら</sup>」<sup>み</sup>「夜と思<sup>み</sup>ば 明<sup>あ</sup>ける夏の夜とやすが、<sup>むねがた</sup>物語い残<sup>ら</sup>す鶏<sup>と</sup>どうらみよる」が記されている。

### 3. 恩納節

1. 恩<sup>うん</sup>納<sup>な</sup>ヨ<sup>だき</sup>岳<sup>ねぶ</sup>ヨ登<sup>のぼ</sup>てい ヤリヤリヨ〈アラユイサーユイサー〉<sup>くだ</sup>うし下<sup>くだ</sup>い見<sup>み</sup>りば  
恩<sup>うん</sup>納<sup>な</sup>ヨ<sup>だき</sup>み<sup>み</sup>やヨ<sup>ら</sup>{ア}び<sup>び</sup>ぬ ヤリヤリヨ〈アラユイサーユイサー〉<sup>てい</sup>手<sup>てい</sup>振<sup>ふ</sup>い清<sup>ち</sup>ら{ア}さ  
エイスリ

恩納岳に登って下の方を見やると、恩納の娘が手を振るのがきれい（なこと）。

2. 谷<sup>たん</sup>茶<sup>ちや</sup>から恩<sup>うん</sup>納<sup>な</sup> 崎<sup>さ</sup>どう隔<sup>ひ</sup>みとる 言<sup>く</sup>葉<sup>とう</sup>変<sup>ば</sup>わらす 水<sup>み</sup>ぬ恨<sup>うら</sup>み

谷茶（恩納村の字名）と恩納（恩納村の字名）とは岬で隔てられている。言葉（方言）を変わらせている水が恨めしい。

3. 恩<sup>うん</sup>納<sup>な</sup>女<sup>みやらび</sup>童<sup>らび</sup>ぬ 綾<sup>あや</sup>宝<sup>ふ</sup>蔵<sup>ぞ</sup>ぬ煙<sup>たばく</sup>草<sup>は</sup> 羽<sup>は</sup>地<sup>に</sup>捌<sup>ち</sup>理<sup>さ</sup>ぬ 大<sup>やま</sup>和<sup>と</sup>手<sup>うてい</sup>持<sup>ち</sup>

恩納の娘のきれいな煙草入れは、羽地（名護市の旧羽地村）の捌理（間切役人の一）の大和からのおみやげ。

### 4. 散山節

1. 散<sup>さん</sup>山<sup>やま</sup>ぬ胡<sup>く</sup>弓<sup>ちやう</sup>{オ}小<sup>こ</sup> スリ にしんと{オ}ぬ胡<sup>く</sup>弓<sup>ちやう</sup>小<sup>こ</sup>〈アラユイヤサヌ〉  
胡<sup>く</sup>弓<sup>ちやう</sup>小<sup>こ</sup>声<sup>こゝろ</sup>聞<sup>き</sup>ちよ{オ}ていスリ 驚<sup>うどろ</sup>か{ア}ん肝<sup>ちや</sup>や 〈アラユイヤサヌ〉  
按<sup>あ</sup>司<sup>じ</sup>が用<sup>ゆ</sup>んならぬ 吾<sup>わ</sup>用<sup>ゆ</sup>にな{な}ゆる サユヨンナ

散山（地名）の胡弓、西んと（地名）の胡弓。胡弓の音を聴いても勇み立たない心持ち

(の者)は按司(位階名)の用も勤まらない。私の用は勤まる。(?)

2. 染<sup>す</sup>みて、染<sup>す</sup>みゆらば 浅<sup>あさ</sup>染<sup>ず</sup>みやんばでむぬ 烏<sup>がらし</sup>若<sup>あか</sup>羽<sup>ばに</sup>ぬ 如<sup>ごと</sup>に染<sup>す</sup>みり

染め物を染めるならば浅染めは嫌。烏の(真っ黒な)羽根のように染めなさい。

## 5. 干瀬に居る節

1. 干<sup>ひ</sup>瀬<sup>し</sup>に居<sup>び</sup>る鳥<sup>とがい</sup>やヨ ウネ 満<sup>みつ</sup>{ウ}潮<sup>すうら</sup>恨<sup>うら</sup>みゆる  
吾<sup>わ</sup>身<sup>み</sup>や暁<sup>あかち</sup>ぬヨ ウネ 鳥<sup>とがい</sup>{イ}ど<sup>う</sup>恨<sup>うら</sup>みゆる

干瀬に留まっている鳥は(飛び立たねばならない)満潮を恨み、わたしは(恋人と別れねばならない)夜明けの鳥をこそ恨む。

2. 干<sup>ひ</sup>瀬<sup>し</sup>ぬ打<sup>う</sup>ち小<sup>く</sup>堀<sup>むい</sup> 鯉<sup>しく</sup>ぬ寄<sup>ゆ</sup>てい来<sup>ち</sup>ちゃん でいかよ思<sup>うみ</sup>童<sup>わらび</sup> 鯉<sup>しく</sup>しきが行<sup>い</sup>かな

干瀬の瀬みには小魚が寄って来ている。さあ愛しい人よ。小魚取りに行こう。

3. 鯉<sup>しく</sup>しきや名<sup>な</sup>付き 真<sup>ま</sup>南<sup>へん</sup>向<sup>か</sup>てい見<sup>み</sup>りば 島<sup>しま</sup>浦<sup>うら</sup>や見<sup>み</sup>しが んじょやウネ見<sup>み</sup>らぬ

小魚取りは口実。真南を向いて見れば、島の浜は見えるが、恋人は見えない。

4. まなとうまなかぎとう 通<sup>かゆ</sup>てい欲<sup>ぶ</sup>さあしが しだし群<sup>ぐり</sup>松<sup>ま</sup>や 下<sup>しちや</sup>ぬ繁<sup>しぎ</sup>さぬや

まな(地名、久米島の真謝のことか)とまなかぎ(地名、久米島の真仲地のことか)と通いあいたくはあるのだけど、しだし(地名、白瀬のことか)の群生している松の下が繁っていて(通えない)。

5. どうく繁<sup>しぎ</sup>さあらば 七<sup>なな</sup>ち灯<sup>とう</sup>籠<sup>るさ</sup>提<sup>さ</sup>ぎてい うりが明<sup>あか</sup>がりば 弥<sup>みるく</sup>勒<sup>く</sup>ウネ世<sup>ゆ</sup>果<sup>が</sup>報<sup>ふ</sup>

とても繁っているのであれば、七つの灯籠を提げておいて、それが明るく灯ったならば、豊年万作。

\*1993年の演唱は、第3節までである。

\*鳥袋源七『山原の土俗』には「干瀬の内ぐむい、しくの寄てちちゃん、でかよ、思童、しくしげがいかな」「しくしげや、なちき、真南向て見れば 島浦<sup>しまのら</sup>や見しが無<sup>ん</sup>蔵<sup>ぞ</sup>や見らぬ」が記されている。

## 6-1. あたい苧 1

1. あたい<sup>うー</sup>苧<sup>なかく</sup>ぬヨ中<sup>ましら</sup>子<sup>ひ</sup> 真<sup>しら</sup>白<sup>ひ</sup>ヨ引<sup>さら</sup>き (晒<sup>さら</sup>ち) ユイサ ヨースラザンナヨイヤサ

サティムツラヨイ

大<sup>やまと</sup>和<sup>と</sup>めるヨさとうが 胴<sup>どうちす</sup>衣<sup>ふかま</sup>ヨ袴<sup>はかま</sup> ユイサ ヨースラザンナヨイヤサ

サティムツラヨイ

屋敷内の畑でできた芭蕉の芯を真っ白に晒して、大和にいらっしゃる恋人の上着と袴 (にしよう)。

2. いん<sup>うー</sup>ちゃ苧<sup>わ</sup>やうみば 吾<sup>たみ</sup>どうが為<sup>な</sup> (なゆい)

ひと<sup>ぬーたみ</sup>うどうゆむさとうが 何<sup>な</sup>為<sup>な</sup>なゆが

短い苧を紡げば私の為になる。(不詳) 悪い恋人が何の為になるのだろうか。

## 6-2. あたい苧 2

1. スレ<sup>かしらちん</sup> 髻<sup>まげ</sup>作<sup>つく</sup>くいけよちんヨ スレ<sup>んばさぎんかん</sup> 芭蕉衣被<sup>か</sup>てい スレザンナヨイ

スレ<sup>わみ</sup> 吾身<sup>やまと</sup>や大<sup>やまと</sup>和<sup>と</sup>宿<sup>やど</sup>かいヨ スレ<sup>わかねと</sup> 吾金<sup>わかね</sup>取<sup>と</sup>いが スレザンナヨイ

かたかしらに髪を結び、芭蕉衣を被って、私は大和人の宿に私のお金を取りに。

2. 打<sup>う</sup>ちとうきば鳴<sup>な</sup>ゆみ 提<sup>さ</sup>ぎとうきば鳴<sup>な</sup>ゆみ

置いておけば鳴るだろうか、提げておけば鳴るだろうか。(一般的には「さとうが持ちなしどう 吾どうや持ちゆる=恋人の持ちようで私は持つのだ」という下句が続く。)

## 7-1. 大田名節 1

1. 大<sup>うふだな</sup>田<sup>ゆみ</sup>名<sup>な</sup>ぬ嫁<sup>よめ</sup>{イ}やヨ ない欲<sup>ぶ</sup>さやあしが ヒヨスリ

朝<sup>あさ</sup>ぬいす水<sup>みづ</sup>{イ}やヨ 汲<sup>く</sup>みぬ<sup>あわ</sup>哀<sup>あ</sup>り スリヨンジョヨ スリヨンジョヨ

田名 (伊平屋島の字名) の嫁にはなりたけれど、朝の冷たい水を汲むのは難儀だ。

2. 朝<sup>あさ</sup>ぬいす水<sup>みづ</sup>や 時<sup>とき</sup>々<sup>とき</sup>どう汲<sup>く</sup>むる 大<sup>うふだな</sup>田<sup>ゆみ</sup>名<sup>な</sup>ぬ嫁<sup>よめ</sup>や ないどうさびる

朝の冷たい水は時々だけ汲むので、田名の嫁に是非なりましょう。

3. 能<sup>ね</sup>羽<sup>は</sup>切<sup>き</sup>り雁<sup>が</sup>鳥<sup>とり</sup> 田<sup>た</sup>名<sup>な</sup>小<sup>こ</sup>堀<sup>ほり</sup>ぬ雁<sup>が</sup>鳥<sup>とり</sup> 情<sup>なさ</sup>切<sup>き</sup>り女<sup>な</sup>童<sup>どう</sup> 田<sup>た</sup>名<sup>な</sup>ぬ女<sup>な</sup>童<sup>どう</sup>

羽根が切れた雁は田名の沼地の雁。情けを知らない娘は田名の娘。

\*島袋源七『山原の上俗』には「うふだなぬ嫁やないぶしゃやあすが 朝の石道の踏みのあわれ」  
「朝の石道や時々ど踏むる、うふだな<sup>ゆん</sup>の嫁やないどしゃびる」が記されている

## 7-2. 大田名節 2

1. 安波<sup>あは</sup>ゆ<sup>くわ</sup>小ぬ<sup>やま</sup>山{ア}よ スリ 哀<sup>あわ</sup>り<sup>やま</sup>山やくとう スンドースリ エイスリスリ  
筵<sup>むしろ</sup>ちゃん<sup>ねー</sup>無<sup>ねー</sup>らぬスリ わらび<sup>むしろ</sup>筵 ヨンナ

安波の山は哀れ山で筵さえない。わらび(植物名。ユシダ或いはオシダのことか)筵。

2. ゆるじてる山<sup>やま</sup>よ 哀<sup>あわ</sup>り<sup>やま</sup>山やくとう 筵<sup>むしろ</sup>ちゃん<sup>ねー</sup>無<sup>ねー</sup>らぬ やがに<sup>むしろ</sup>筵

ゆるちという山は哀れ山で筵さえない。やがに(植物名。クワズイモ)筵。

\*平敷カメさんは「安波の山は禿げ山なのでわらび筵で、奥の山はよく繁っているのでやがに筵  
だろう」と説明している。

## 8. あぬ伊集

1. あぬ<sup>いじゅ</sup>伊集ぬ<sup>はな</sup>ヨ花{ア}や シタリス ナ如何<sup>いぢゃ</sup>スガ 真<sup>ましら</sup>白<sup>さ</sup>ば{ア}な咲<sup>さ</sup>ついでヨ

サーシタリスヨ

吾身<sup>おぬ</sup>ん伊集<sup>いじゅ</sup>ヨやと{オ}てい シタリス ナ如何<sup>いぢゃ</sup>スガ 真<sup>ましら</sup>白<sup>さ</sup>ば{ア}な咲<sup>さ</sup>かなヨ

サーシタリスヨ

あの伊集の花は真っ白な花が咲いている。私も伊集だから真っ白な花を咲かせよう。(2  
句目の「真白花」は「あが真白」とも歌われることがある。)

2. 思<sup>うむ</sup>ゆらばさとう前<sup>め</sup> 島<sup>しま</sup>かめていもり 島<sup>しま</sup>や平<sup>ひら</sup>島<sup>じま</sup>ぬ 港<sup>みなと</sup>前<sup>うめ</sup>なていヨンナ

思っているのならば恋人よ、村を探していらっしやい。村は平らな村で港が前になってい  
る。

## 9. ハリ諸屯

1. ハリ<sup>すぢん</sup>諸屯<sup>なが</sup>ヨ長{ア}ヨは{は}まぬ

ハリヒヤルガヨーヘイ

諸鈍（加計呂麻島の字名）長浜の

2. ハリ謝敷<sup>じやじち</sup>ヨ板<sup>いた</sup>{ア}ヨび<sup>ひ</sup>{び}しぬ ハリ 打ち<sup>う</sup>ちゃいヨ引<sup>ひ</sup>く{ウ}ヨな{な}みぬ

ハリヒヤルガヨーヘイ

謝敷（国頭村の字名）板干瀬の、打ち寄せ引く波の。

\*この歌詞は1974年の古老達の演唱による。

## 10. ちんなく節

1. ちんなくぬ<sup>ほじ</sup>始<sup>た</sup>み 誰<sup>はじ</sup>がし始<sup>ほじ</sup>みたが チンナク

奥<sup>うく</sup>間<sup>ま</sup>二<sup>に</sup>才<sup>せ</sup>衆<sup>す</sup>達<sup>た</sup>が な<sup>う</sup>受<sup>と</sup>き取<sup>と</sup>たせ ヒヤルガ チンナク

奥<sup>うく</sup>間<sup>ま</sup>二<sup>に</sup>才<sup>せ</sup>衆<sup>す</sup>達<sup>た</sup>が な<sup>う</sup>受<sup>と</sup>き取<sup>と</sup>たせ ヒヤルガ チンナク シッシッシ

《ちんなく》の始まりは誰が始めたの？ 奥間の若者達がもう受け取ったよ。

2. 安<sup>あ</sup>波<sup>は</sup>ぬ<sup>み</sup>港<sup>なとうぐわ</sup>小<sup>くわ</sup>に み<sup>ち</sup>じゅん小<sup>ち</sup>ぬ来<sup>ち</sup>よせ 吾<sup>わした</sup>達<sup>だ</sup>が手<sup>て</sup>籠<sup>籠</sup>がま<sup>つ</sup>作<sup>つく</sup>てい、掬<sup>すく</sup>いんかみ<sup>すく</sup>じゅん

安波の港に鯛が来ているよ。私たちは手籠を作って掬おう鯛を。

3. 城<sup>ぐ</sup>前<sup>く</sup>ぬ<sup>め</sup>苺<sup>いちび</sup> ま<sup>ま</sup>かい<sup>め</sup>が<sup>め</sup>苺<sup>いちび</sup> 吾<sup>わした</sup>達<sup>だ</sup>が手<sup>て</sup>籠<sup>籠</sup>がま<sup>つ</sup>作<sup>つく</sup>てい、む<sup>む</sup>いんか<sup>いちび</sup>苺

城前の苺、どこへいったの苺。私たちは手籠を作って、もごうよ苺を。

\*1974年の実況ではこの他に多くの歌詞が歌われているが、以下の歌詞以外は採取不能。

• 童<sup>わらび</sup>小<sup>ぐわ</sup>ぬい<sup>ぐわ</sup>そ<sup>ぐわ</sup>さ 種<sup>たんと</sup>取<sup>と</sup>いと<sup>と</sup>正月<sup>そーがち</sup> 女<sup>みやらび</sup>童<sup>ぐわ</sup>ぬい<sup>ぐわ</sup>そ<sup>ぐわ</sup>さ 十<sup>じゅ</sup>五<sup>ご</sup>夜<sup>や</sup>で<sup>や</sup>む<sup>む</sup>ぬ

子どもの楽しみは種取りと正月。娘の楽しみは十五夜だもの。

\*1993年の演唱では上記の2. 3節は歌われず、以下の歌詞が歌われている。また、下句の反復は行われていない。

• 天<sup>ていん</sup>ぬ<sup>むらぶし</sup>群<sup>ぐん</sup>星<sup>せい</sup>や 読<sup>よ</sup>み<sup>よ</sup>ば<sup>よ</sup>読<sup>よ</sup>まり<sup>よ</sup>ゆい 親<sup>うや</sup>ぬ<sup>ゆ</sup>寄<sup>ぐと</sup>し<sup>ゆ</sup>言<sup>ゆ</sup>や 読<sup>よ</sup>み<sup>よ</sup>や<sup>よ</sup>なら<sup>よ</sup>ぬ

天の群星は数えれば数えられるが、親の教訓ははかり知れない。

- ていんさぐぬ<sup>はな</sup>花や 爪<sup>ちみさち</sup>先に<sup>す</sup>染<sup>うや</sup>みてい 親<sup>ゆ</sup>ぬ<sup>ぐと</sup>寄<sup>ち</sup>し<sup>す</sup>言<sup>す</sup>や 肝<sup>ち</sup>に<sup>す</sup>染<sup>す</sup>みり

鳳仙花の花は爪の先に（赤く）染めて、親の教訓は心に染めなさい。

- 夜<sup>ゆる</sup>走<sup>は</sup>らす<sup>ふに</sup>船<sup>に</sup>や 子<sup>は</sup>ぬ<sup>ぶし</sup>方<sup>み</sup>星<sup>あ</sup>目<sup>あ</sup>当<sup>あ</sup>てい 吾<sup>わ</sup>ん<sup>わ</sup>な<sup>うや</sup>ち<sup>わ</sup>える<sup>あ</sup>親<sup>あ</sup>や 吾<sup>わ</sup>ん<sup>わ</sup>ど<sup>う</sup>ろ<sup>あ</sup>目<sup>あ</sup>当<sup>あ</sup>てい

夜走る船は北極星を目当てにする。私を産んだ親は私こそが目当てだ。

## 11. ちんちゃぐぬ花

1. ちんちゃぐぬ<sup>はな</sup>花<sup>う</sup>や 落<sup>さ</sup>て<sup>さ</sup>い<sup>さ</sup>て<sup>さ</sup>い<sup>さ</sup>ま<sup>さ</sup>た<sup>さ</sup>咲<sup>み</sup>ち<sup>ら</sup>ゆ<sup>い</sup>い 女<sup>み</sup>童<sup>や</sup>ぬ<sup>ら</sup>花<sup>はな</sup>や 咲<sup>さ</sup>ち<sup>ら</sup>ゆ<sup>い</sup>る<sup>さ</sup>一<sup>ち</sup>花<sup>はな</sup>

ウマデンスナ

女<sup>み</sup>童<sup>や</sup>ぬ<sup>ら</sup>花<sup>はな</sup>や 咲<sup>さ</sup>ち<sup>ら</sup>ゆ<sup>い</sup>る<sup>さ</sup>一<sup>ち</sup>花<sup>はな</sup> ウマデンスナ

鳳仙花の花は（種が）落ちてまた（翌年に）咲く。娘の花は咲く一花（＝一度きりの青春）。

2. 天<sup>てい</sup>ぬ<sup>むらぶし</sup>群<sup>ゆ</sup>星<sup>ゆ</sup>や 読<sup>う</sup>み<sup>ゆ</sup>ば<sup>ぐと</sup>読<sup>ゆ</sup>まり<sup>ゆ</sup>ゆい 親<sup>う</sup>ぬ<sup>ゆ</sup>寄<sup>ぐと</sup>し<sup>ゆ</sup>言<sup>ゆ</sup>や 読<sup>ゆ</sup>み<sup>ゆ</sup>や<sup>ゆ</sup>なら<sup>ゆ</sup>ぬ

（《沈仁屋久》参照）

3. 童<sup>わらび</sup>小<sup>くわ</sup>ぬ<sup>わ</sup>い<sup>わ</sup>そ<sup>わ</sup>さ 種<sup>たんと</sup>取<sup>と</sup>い<sup>と</sup>う<sup>と</sup>正<sup>そ</sup>月<sup>がち</sup> 女<sup>み</sup>童<sup>や</sup>ぬ<sup>ら</sup>い<sup>わ</sup>そ<sup>わ</sup>さ 十<sup>じゅ</sup>五<sup>ご</sup>夜<sup>や</sup>で<sup>や</sup>む<sup>や</sup>ぬ

（《沈仁屋久》参照）

4. 親<sup>う</sup>加<sup>が</sup>那<sup>な</sup>志<sup>し</sup>ふ<sup>し</sup>ぎ<sup>し</sup>に く<sup>く</sup>ひ<sup>ひ</sup>な<sup>な</sup>ふ<sup>ふ</sup>ど<sup>ど</sup>う<sup>う</sup>い<sup>い</sup>ち<sup>ち</sup>よ<sup>よ</sup>て<sup>て</sup>い 何<sup>ぬ</sup>で<sup>ゆ</sup>い<sup>ゆ</sup>親<sup>う</sup>加<sup>が</sup>那<sup>な</sup>志<sup>し</sup> く<sup>く</sup>ち<sup>ち</sup>れ<sup>れ</sup>す<sup>す</sup>し<sup>し</sup>が

御父様・御母様のお陰でこんなに大きな背丈に育ててくれたのに、なんで御父様・御母様を無碍に出来ましょうか。

5. 夫<sup>う</sup>ん<sup>ん</sup>振<sup>ふ</sup>や<sup>ふ</sup>び<sup>び</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ 姑<sup>し</sup>ん<sup>ん</sup>振<sup>ふ</sup>や<sup>ふ</sup>び<sup>び</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ な<sup>な</sup>ま<sup>ま</sup>童<sup>わら</sup>な<sup>ら</sup>て<sup>ら</sup>い<sup>ら</sup>ど<sup>ら</sup>う 一<sup>つ</sup>人<sup>い</sup>や<sup>い</sup>振<sup>ふ</sup>た<sup>た</sup>る

夫も振りません、姑も振りません、今や子ども（独り者）になって一人振った。（全体の意は不詳）

\*1974年の実況では他の歌詞も歌われているが採取不能。

\*1993年の演唱では上記の歌詞は歌われず、以下の歌詞が歌われている。

- 安<sup>あ</sup>波<sup>は</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>ん<sup>ん</sup>殿<sup>とん</sup>内<sup>ち</sup> ハリ 黄<sup>く</sup>金<sup>が</sup>灯<sup>に</sup>籠<sup>ど</sup>提<sup>り</sup>ぎ<sup>ぎ</sup>てい 此<sup>こ</sup>が<sup>が</sup>明<sup>あ</sup>が<sup>が</sup>り<sup>り</sup>ば 弥<sup>み</sup>勒<sup>ろく</sup>世<sup>せ</sup>果<sup>が</sup>報<sup>ふ</sup>



安波のぬる殿内に、黄金の灯笼を掲げて、此が明るく灯ったならば、豊年万作。

## 12. 永良部潟原

1. 永良部潟原に<sup>いらぶかたばる</sup> ササ<sup>にし</sup> 北ぬ潟原に<sup>かたばる</sup>

ヒックリ チュラヨハリチュラヨ ハリウムシルヤ スリ フックラサヌヤ スリ

2. うきみじゅん<sup>ゆ</sup>寄てい<sup>ち</sup>来<sup>ち</sup>ちよん うきはだ<sup>ゆ</sup>ら寄てい<sup>ち</sup>来<sup>ち</sup>ちよん

永良部の干潟に、北の干潟に

鰯が寄ってきている、はだらが寄ってきている

3. うるじんが<sup>まはだうー</sup>真肌<sup>わー</sup>苧<sup>うす</sup> 吾<sup>どちん</sup>が御主<sup>うす</sup>が<sup>ふあかま</sup>胴衣<sup>ふあかま</sup>

4. 若夏<sup>わかなち</sup>が<sup>う</sup>ちみ<sup>わー</sup>が<sup>うす</sup>苧<sup>ふあかま</sup> 吾<sup>うす</sup>が<sup>ふあかま</sup>御主<sup>ふあかま</sup>が<sup>ふあかま</sup>袴<sup>ふあかま</sup>

初春の柔らかい苧で、私のご主人の上着を

初夏の（不詳）苧で 私のご主人の袴を

5. 八<sup>や</sup>たむ<sup>と</sup>しるむ<sup>と</sup>しるし<sup>と</sup>ち 十<sup>と</sup>たむ<sup>と</sup>しるむ<sup>と</sup>しるし<sup>と</sup>ち

6. 三<sup>み</sup>わ<sup>と</sup>ま<sup>うら</sup>鳥<sup>な</sup>ぬ<sup>と</sup>恨<sup>と</sup>み<sup>と</sup>さ<sup>うら</sup>ぬ 七<sup>な</sup>わ<sup>と</sup>ま<sup>うら</sup>鳥<sup>な</sup>ぬ<sup>と</sup>恨<sup>と</sup>み<sup>と</sup>さ<sup>うら</sup>ぬ

（不詳。寝莫産を敷きの意か。不詳。寝莫産を敷きの意か。）

（不詳）鳥が恨めしい。（不詳）鳥が恨めしい。

7. 一<sup>てい</sup>ち<sup>た</sup>二<sup>み</sup>ち<sup>ゆ</sup>三<sup>いち</sup>ち<sup>む</sup>四<sup>なな</sup>ち<sup>や</sup>五<sup>くぬ</sup>ち<sup>と</sup>六<sup>と</sup>ち<sup>と</sup>七<sup>と</sup>ち<sup>と</sup>八<sup>と</sup>ち<sup>と</sup>九<sup>と</sup>ち<sup>と</sup>十<sup>と</sup>

ひー、ふー、みー、よー、いつ、むー、なな、やー、この、とー

\*1993年の演唱では第6節が省略されている。

## 13. 安波節

1. 安波<sup>あは</sup>ぬ<sup>ど</sup>ぬ<sup>ぬち</sup>ん<sup>ぬち</sup>殿<sup>ぬち</sup>内<sup>ぬち</sup> ハリ<sup>ぬち</sup> 黄金<sup>くがに</sup>灯笼<sup>どうる</sup>提<sup>さ</sup>ぎ<sup>さ</sup>て<sup>さ</sup>い

トゥントゥンテントゥン 誰<sup>タ</sup>ガ<sup>ス</sup>主<sup>ス</sup>ル<sup>メー</sup>前<sup>ユ</sup>ユ スッ<sup>ミヤラビター</sup>サ<sup>ミヤラビター</sup>女<sup>ミヤラビター</sup>童<sup>ミヤラビター</sup>達<sup>ミヤラビター</sup>

此<sup>くり</sup>が<sup>あち</sup>明<sup>あ</sup>が<sup>あ</sup>り<sup>あ</sup>ば<sup>あ</sup> ハリ<sup>あ</sup> 弥<sup>みる</sup>勒<sup>く</sup>世<sup>ゆ</sup>果<sup>が</sup>報<sup>あ</sup>

トゥントゥンテントゥン 誰<sup>タ</sup>ガ<sup>ス</sup>主<sup>ス</sup>ル<sup>メー</sup>前<sup>ユ</sup>ユ スッ<sup>ミヤラビター</sup>サ<sup>ミヤラビター</sup>マ<sup>ミヤラビター</sup>ー<sup>ミヤラビター</sup>グ<sup>ミヤラビター</sup>シ<sup>ミヤラビター</sup>カ<sup>ミヤラビター</sup>

《ちんちゃぐぬ花》参照

2. 東<sup>あがりあちや</sup>明<sup>しみなれ</sup>が<sup>かしらゆ</sup>り<sup>たほ</sup>ば 墨<sup>お</sup>習<sup>う</sup>が<sup>お</sup>行<sup>う</sup>ち<sup>す</sup>ゆ<sup>が</sup>い 髻<sup>な</sup>結<sup>し</sup>て<sup>な</sup>い<sup>し</sup> 給<sup>り</sup> 吾<sup>お</sup>御<sup>う</sup>主<sup>す</sup>加<sup>が</sup>那<sup>な</sup>志<sup>し</sup>

東が明るくなれば（＝夜が明ければ）学問しに行くから髪を結って下さい。ご主人様。

\*1993年の演唱は、旋律が古典の《安波節》に変化しており、歌詞は以下の歌詞の次に上記1が歌われている。また、後囃しも変化している。

• 安<sup>あ</sup>波<sup>は</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>真<sup>ま</sup>は<sup>は</sup>ん<sup>ん</sup>た<sup>た</sup>や ハリ 肝<sup>ち</sup>す<sup>す</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>処<sup>ど</sup>

トゥントゥンテントゥン トゥントゥンテン

（トゥントゥンテントゥン タガスルメユ スッサ女童達 と歌う人もいる。）

宇<sup>う</sup>久<sup>く</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>松<sup>ま</sup>下<sup>した</sup>やハリ 寝<sup>に</sup>な<sup>な</sup>し<sup>し</sup>処<sup>ど</sup>

トゥントゥンテントゥン トゥントゥンテン

（トゥントゥンテントゥン タガスルメユ スッサ女童達 と歌う人もいる。）

安波の真はんたは気持ちを集める所。宇久（国頭村の地名）の松の下は（恋人と）寝る所。

\*宮城栄昌『沖縄のノロの研究』の自序には、真はんたは「日のパンタ」といい、太平洋から上がる太陽がよく見えるハンタ（＝坂）で、ノロ殿内から50メートルくらいの所であると記されている。また、真はんたの奥の野原には枝振りの良い松が生えていたが、落雷で焼けてしまったとのことである。<sup>2</sup>

#### 14. あさぎ庭

1. あさぎ庭<sup>まー</sup>に出<sup>んち</sup>てい 面<sup>ち</sup>隠<sup>かく</sup>す<sup>い</sup>女<sup>なぐ</sup> うり<sup>しま</sup>ど<sup>あま</sup>う<sup>あま</sup>島<sup>あま</sup>々<sup>あま</sup>ぬ 余<sup>あま</sup>い<sup>あま</sup>へ<sup>あま</sup>ず<sup>あま</sup>ら

あさぎの広場に出て顔を隠す女は、それこそ村々の売女だ。

2. あさぎ庭<sup>まー</sup>ぬ<sup>あ</sup>芥<sup>くた</sup> 誰<sup>たー</sup>が<sup>たー</sup>さ<sup>たー</sup>ね<sup>たー</sup>く<sup>たー</sup>な<sup>たー</sup>ち<sup>たー</sup>え<sup>たー</sup>が 吾<sup>わ</sup>達<sup>した</sup>女<sup>み</sup>童<sup>や</sup>ぬ<sup>ら</sup> さ<sup>ら</sup>ね<sup>ら</sup>く<sup>ら</sup>な<sup>ら</sup>ち<sup>ら</sup>え<sup>ら</sup>さ

あさぎの広場のごみは、誰が細かく砕いたのか。私たち娘が細かく砕いた。

\*この歌は1993年には歌われていない。

#### 資料2 註

1. 島袋源七『山原の土俗』は昭和4年に郷土研究社から出版。本論では『日本民俗誌

- 大系 第1巻 沖繩』1976 角川書店に復刻されたものを使用。p.315。  
2. 宮城栄昌『沖繩のノロの研究』吉川弘文館（1979） 自序 pp.3-4。